
Vampire Blood

天月 琉架

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Vampire Blood

【Nコード】

N0647I

【作者名】

天月 琉架

【あらすじ】

遠い昔の記憶を追い求めるために執念で名門・桜華学院に合格したはずだった淡海凜^{おうみりん}、16歳。しかし1年経っても失った記憶の力ケラが見つからなく、焦燥する毎日。オマケに軽い調子で入学当時から言い寄ってくるセンパイと怪しげな生徒会長が邪魔してきて…！？あと半年に迫った約束を無事に果たすことが出来るのだろうか？現代ファンタジー風学園モノBL小説です。

序章

子供のころ、何の疑いもなく信じていたんだ。
ただただ、純粹にそうであると思ってた。

透き通るような銀の長い髪。

キラキラしていてとても綺麗だと思った。

小さな手を伸ばしてそれに触れようとすると、その人は優しく微笑んでくれた。

触りやすいようにしゃがみ込んで、代わりに頭を撫でられる。

触ってしまったら溶けて無くなっちゃいそうだったけど、好奇心に勝てずに恐る恐る触れてみた。

けれどあまりのなめらかさにすぐに手の中から滑り落ちてしまう。
何度掴んでみようと思っても、やっぱりスルリと零れ落ちていく。
ムキになって挑む自分を見て、その人は可笑し^{おか}そうに笑った。

「お前はバカだな」

くつくつと妖艶に微笑みながら頭の上に乗せた手でグリグリとかき混ぜる。

母親譲りらしいぬばたまの黒髪がびよこびよこと跳ねてその人の指先をくすぐった。

「おれは違うもん。バカって言ったやつがバカなんだよっ」

ちよいちよい悪戯するその大きな手のひらを払いのけようとするが、オトナとコドモほどの体格差から良い様に遊ばれてしまうだけだった。

た。

ひとしきり駆け引きにもならないやりとりを楽しむと、やんわりと手を離して立ち上がった。

「あれ？どこに行くの？」

「もう日が暮れる。ココは夜になると危ない。おうちへお帰り」

「やだっ。もつと　と一緒にいたいよ！おれ、　のこと好きだもん！！」

「ふふ…困ったヤツだな。いつか、お前も私のことを忘れてしまうのに」

「そんなことない！だって、　はこんなにキレーだし、いつもおれと遊んでくれてるじゃん。おれ、友達のことわすれたりなんてしない」

どうしてそんなことを言うのだろうか。

自分にとって、この人は大切な存在だと思っているのに。

それともコドモだから相手にしてもらえないのだろうか…。

どうすればこの人の一番になれる？

何をすれば、ずっとずっと一緒にいてくれるんだろう？

そういえば…とひとつだけ思いついた。

「ね、『やくそく』しよつ。ずっとずっと、えいえんに一緒にいられる『やくそく』」

「永遠に？」

「うん。おれはずっと　が好きだもん。もしもオトナになつて…ゼツタイありえないけど、それでももしも…おれがわすれちゃつても、また思い出せるように」

「お前が大人になつても、か…」

「…おれ、オトナになつたら　の一番になりたい。今はまだコドモだから、　は相手にしてくれないのかもしれないけど、オ

トナになったらもっかいチャレンジする。そんで、『お前が私のイチバンだ』って言わせるんだ。そうしたら、ずっとわすれないでしょ？」

「くく…面白いやつだな、お前は。どうしたら私がそれを言ったらお前は忘れないってことになるんだ？」

まるで夢物語のようにまるきり話を信じてくれず、その人は不思議そうに聞いた。

（おれはホンキなのに）

自分の気持ちがまるで伝わっていなくて悲しくなる。

忘れてしまうのは最早決定事項になっていて、全然信じてくれない。この人がそうまで言うのなら、もしかしたら自分は本当に忘れてしまうのかもしれない。

だけど、どうしても忘れてたりなんてしたくなかった。

もしも忘れてしまっても、絶対に思い出したかった。

（この人の、イチバンになりたいんだもん…っ。）

自分がそうであるように、この人にも自分のことを好きになって欲しかった。

友達だと思って欲しかったんだ。

「おれ、はくじょーじゃないもん。むしろ、あいじょーたっぷりあるほうなんだ。だから、に『イチバンだ』って言われたらうれしくないちゃうし、ゼツタイにわすれらんない。いつしよーかけてちかってもいいよ。のイチバンになれたらケツコンしてもいい。ほかのヤツなんてどーでもよくなっちゃうよ。だれかのイチバンになるって、それくらいスゴイことでしょ？」

最近聞いたばかりの言葉を並べて、精一杯にこの人の気を留めようと必死になる。

本当の意味はまだよく分かっていなかったけれど、『ケツコン』す

れば『いっしょー』一緒にいるってことだけはなんとなく分かった。

『いっしょー』の意味が分かんなかったけど、たぶんずっとずっと長い時間を一緒にいられることなんだって思ったから。

その人はぼかんと少し呆けているようだった。

もしかしたら何処かオカシな言葉を使ってしまったのかもしれない。どうしよ、と思うも、これ以上どう言えいいのか分からない。

流れるような白銀の髪と全てを見透かすような左右色の違う瞳。

海のような碧い瞳と焰のような紅い瞳を見上げると、そのふたつが思案するように少しだけ伏せられるがすぐに真っ直ぐ見つめてくる。見たこともないほど真剣な眼差しを向けられて、ちよつとだけ怖くなった。

（怒ったのかな…）

我俣ばかり言ったから、嫌いになってしまったのかもしれない。

ただ、自分のことを好きになって欲しかっただけなのに。

不安になってその端整な顔を見つめると、その人は射抜くような視線のままそつと自分の頬を撫でた。

「お前が私の一番になってしまったら、困るのはお前の方なのに…」

「なんでそうゆうコトいうんだよ。おれのこと、そんなにキライだったのかっ？」

「そうではない。お前が嫌いだとかそういうことなのではなくて…」

「ただ、私は　　なんだ。お前と共に生きるには、支払う代償が大きすぎる」

苦しげに告げられた言葉が上手く聞き取れない。

シハラウとかダイショーとかって言葉の意味も分かんないし。

ただ、その表情からスッゴク大変なことなんだってことだけは分かった。

だけど、それでも。

「の言ってるいみがよくわかんないけど、それでもいいよ。おれ、いのちのこと以外だったらなんでもあげるよ」

「本当に…？」

「オトコにニゴンはないっ」

「ふふ…そうか、小さくともお前も立派な男だったのだな。分かった、約束しよう。お前が大人になって、それでも私のことを思い出すことが出来たのなら、お前に私の一番をあげよう」

「ホントウ！？」

約束すると言われてテンションが舞い上がる。

ゼツタイにわすれたりしないもん…っ。

半ば意地みたいになりながら心の中で再度決心した。

「もちろん。ただし…」

「ただし？」

「お前が十七を迎える刻^{とき}までだ。それを過ぎたら、私はお前に関する一切のことを忘れよう。それでもいいのか…？」

「じゅーしちつて…なんでそんなちゅーとはんぱなんだ…？はたちとかのほーがキリがいいのに」

「だめだ。１秒たりともまけてなどやらぬ」

「けちー」

「私はケチなどではないっ。それ以上我俣を言うのなら約束などしてやらんぞっ！」

「ああああゝゝゝっ！！！！ごめんなさいっっっ、いいよそれでっ！！！！！！」

「ふん、最初から素直に頷けば良いのだ」

そっけなく言うけれど、まんざらでもない様な顔でニヤリと笑みを浮かべている。

やっぱりコドモの自分では、この人に良い様にあしらわれてしまう。
いつか、オトナになったら。
ココロの中で強く誓った。

「ね、『やくそく』のちかいしょっ」

「誓い？どうしたいのだ」

「ちよつとこつち来て」

ちよいちよいつと手招きをして顔寄せてもらうと、その頬にちゅつと口付けをした。

するとびっくりしたように双眸そめつぱうを大きく開いて瞬かせている。
しばらくすると、プツと零れるように笑われてしまった。

「なんでわらうんだよーっ」

「くく…っ、いや、お前らしいなと思ってな」

尚も笑い続けるこの人に、なんだか悔しさを感じる。
まあでも、約束してくれたのだから良しとしよう。

「ね、おれにもして」

「なぜだ？」

「だっておたがいにかいかいあわなくちゃ、やくそくにならないじゃん」

「ああ、そうか」

その人は両の手で幼い顔を包み込むと、そつと柔らかい唇に口付けを交わした。

なんでほつぺたじゃないの…？

ちゃんと同じようにしてくれなかったことがちよっぴり気に入らないけれど、触れられた部分が柔らかくて少し冷たかった。

恥ずかしかったけれど、それでも今までよりもずっと距離が近づいた感じがして嬉しくなった。

「約束、だな」

「やくそく、だよ」

もう一度念を押すように約束をしてから別れ、次の日にまた訪れるけれど、そこにはあったハズのものが何も無かった。

あの人の家も、二人で過ごした大きな1本の桜の木も あの人自身も。

苦しくて悲しくて、その日はずっとその場所で途方に暮れていた。それまでの日々がまるで夢であったかのようにボロボロと崩れ落ちていく。

幼い心に残された大きな傷。
しばらくは自分がどうしていたのかそこだけは今でも思い出せなかった。

そうして俺は、あの人との記憶を失ってしまった。

序章（後書き）

新システム移行時に一部文字変換が違ってしまっていたため修正しましたが、内容に変更はありません。

すべて修正したつもりではありますが、誤字・脱字など、おかしい部分がありましたら教えていただけると助かります。

それとは関係なく、評価・感想いただけたらめっちゃ嬉しいです（
^^）

どうぞ宜しくお願い致しますm（　　）m

第一話

ふっと目が覚めると、頬に濡れたものを感じた。
指先で触れてみて自分が泣いていたことに気が付くと、手の甲でゴシゴシと拭う。

（またあの夢か…）

時折見る、切なくて悲しい夢。

大切な誰かと約束したはずなのに、どうしてもそれが思い出せない。
とても綺麗な人だったはずなのに、霞が掛かったようにその顔をハッキリと見ることが出来なかった。

同じ夢を何度も見るせいかな、それが現実だったのか夢なのか判断がつかなくなっていく。

ガラスみたいに透明な銀の髪。

不思議な色をしたオッドアイの瞳。

触れた指先は作り物のように白く細長くて。

性別すらも判断出来ないような綺麗な人だったんだと印象だけはなんとなく覚えている。

「…俺、欲求不満なのかな」

自分の言葉にちよっぴり傷ついて、はあ…とため息を一つ零すと顔を洗って学校に行くべくベットから抜け出した。

淡海^{おつみ}

凜^{りん} 16歳。

青春真っ只中の高校2年生。
俺には最近、悩みが2つほどある。

1つはさっきの夢の話。

『十七の刻を迎えたら…』って言葉。

あと半年ほどで17歳の誕生日を迎えるけれど、本当にこのままでいいのだろうかと思っている。

夢が夢のままじゃなかったら。

俺はきつと、後悔するような気がする。

あの夢のことがあったから、俺は今の高校に進学しようと思ったくらいだ。

勉強は苦手だけど、何か引かかるコトがあったらそのままにしちやいけないと思って。

ほとんど本能的なものだったんだけど…ね。

まあそれはおいおい何とかするとして。

それよりも目下の悩みはマジで切実だ。

いい加減、どうにかしないと本気で俺は喰われると思うんだ。
それって言うのが

「淡海、オハヨウ。今日も可愛いね」

って言うてるそばから来たよ…悪魔が。

登校中の凜に声を掛けたのは、どこからどう見ても爽やかそうな顔をした一人の男。

友達でもないのに馴れ馴れしく凜の肩を抱こうとしているコイツは
鷹司^{たかつかき} 紅^{こう}。

去年、超名門進学校・私立桜華学院に奇跡的に合格し、浮かれた気分で初登校した凜に一目惚れしたとかしいとかで、毎日言い寄ってきている。

しかし、鷹司は自他共に認める浮名流しの遊び人で、毎日違う男女（！）を連れているのだ。

この男は桜華学院ミスターNo.2の人気者で、どこにいても目立つて仕方がない。

何度経験しても慣れない、他生徒の好奇心の目。

凜は当たり前のように伸びてきた腕を邪険に振り払った。

「おはようございます、センパイ。でも何度も言いますが、俺は可愛くなんてないし、男が可愛いなんて言われても嬉しくありません」と、いうわけで失礼します」

「ツレナイなあ。このオレが声を掛けて落ちない子なんていなかったのに。でも、ソコがまたイイんだよね」

「はあ！？…ってうわあっ」

そう言っただけは強引に凜の細い腰に腕を回して抱き寄せる。

グツと引き寄せられた凜はバランスを崩して鷹司の胸に飛び込む体勢になってしまった。

くんと鼻先を掠めるシトラスの香り。

爽やかな微香と意外にも逞しい胸板に驚きを覚えた。

（ああもうっ！何なんだよ、この人はつつっ！！）

いくら男女共にモテまくろーがお綺麗な顔だろーが、男に興味なんかないつつの！

なのに動揺する自分が情けなく思えた。

「何すんですかつ！！離してくださいよつつ！！」

「ええーいいじゃん、もうちょっと」

「全然良くないです！！俺はまだ死にたくありませんつつ！！」

こんな道のと真ん中で男子高校生がくつついているのだ。
凜に周囲を喜ばせる趣味も（いろんな意味で）鷹司のファン（男女
多数！！）に怨みを持たれるつもりも毛頭ない。
さつきからチクチクと好奇な視線が当たってかなりイタイ。
それなのにより抱きしめようと腕を回す鷹司に腹が立つ。

だあーっ、もう知らねえっ！！！！

ぶちつとキレた凜は、先輩だからとお伺い立てることなく力いっぱいに突き飛ばし、悪魔の所業から逃れるべくダッシュで学校へと続く桜並木を走り抜けた。

「またやつちまった……。でもセンパイが悪いんだからしょーがないか」

校舎前まで駆け抜けて、ようやく一息吐く。

それよりもこの現状がどうにかならないかと思案するも、中々良い考えが浮かばない。

とりあえず最初の時に大したことはないと軽く考えて放っておいたのが失敗だった。

けれど今さら後悔しても仕方ない。

一つため息を零して、凜は教室へと向かった。

「凜！お前ついに王子とくっ付いたって本当か！？」
「してねーよバカ！！」

ガラリと教室のドアを開けると、開口一番に尋ねられた。
まだ10分しか経ってないのに何だよこの情報の速さは！

携帯という文明機器にちよつとだけ逆恨みをする。

登校中の生徒は他にもたくさんいたが、それにしたって自分が来るより情報の方が早いってのはどう考えてもオカシイ。

それだけ周囲に興味を持たれていることに未だ気づかない凜は、苛立たしさ全開で怒鳴り返していた。

「まじか。あー良かった。まさか親友がついに王子に喰われちまったのかと本気で心配しちゃったぜ」

「…………。お前さ、いつペン死んでみたいよね？」

「ぎゃーーーーーっつっっお願いやめてプリーズ！！！」

凜が触れて欲しくない話題にズカズカ遠慮なく聞いてくるこいつは

悪友・九条くじょう 雅人まさひと。

きつめのヘッドロックを掛けてそのままブン投げてやりたいところだが、狭い教室の中なので首を絞めるだけにしてすぐに手を離れた。

「で、本当のところはどうなのさ？」

見晴らしの良い窓際の自分の席に座るなり雅人が聞いてくる。

凜はカバンから教科書などを取り出し、机の中に入れながら適当に答えた。

「別に。たまたま登校中にエンカウトしちゃっただけ」

「エンカウト……ておまつ、みんなの王子さまをモンスター扱いするか？フツ」

「うつせ。俺にとってはモンスターのほうが断然可愛いっつもの！」

毎度ほぼ日課のように狙われ襲われ口説かれる身にもなってみろ。

おまけに相手はあの鷹司。

いくらお綺麗であるーと全校生徒の憧れであるーと、相手は男。

しかも男女共に手を出しまくるプレイボーイなのだ。

そんなヤツからの言葉など信用性まるでナシ。

本気で相手にするほうがバカなのだ。

何を思つて1年も構つてくるのか分からないが、からかうのもいい加減にして欲しかった。

他のことに煩^{わづら}っている時間など、凜には無いのに。

（はあ…。）

そのことを思うと自然とため息が零れる。

思い出したいのに思い出せないもどかしさ。

もう喉から出掛かつているのに、あと少し何かが足りない。

雲を掴^{つか}もうとするみたいに手を伸ばしたらあつという間に逃げてしまふ。

「くそ…っ」

本当にタダの夢だったのか？

同じ夢をたまたま何度も見ているだけなのか…。

タイムリミットが近づくにつれ、焦りにも似た苛立たしさが増していく。

元来物事はハッキリとさせないと気がすまない負けず嫌いな性格が、余計にそれを助長させていた。

「どしたー？最近、機嫌悪いじゃん」

「そうか？悪い…ちよつと、夢見が悪くて」

いくら親友とは言え、あの夢のことを話す気にはなれない。適当に誤魔化すと、雅人が意味深な笑みを浮かべた。

「ふっふーん、さては恋だな！？」

「はあ？」

何故そうなるんだよ、この悪友^{バカ}。
嫌そうに眉をしかめるけれど、まったく気づかずに妄想に浸っている。

「ああ、みんなのアイドルがついに恋かあ。無駄にモテるくせに全然興味持たないんだもん。そんな凜を射止めた相手はどんなヤツだ！？やっぱ凜に負けない美人かな。いやいや、勝気なこいつをメロメロに出来るなんてやっぱオトナの余裕がある綺麗系の年上だろっ」

「……突っ込みどころが満載過ぎてむしろ何も言えねえよ」

「ん？その条件に当てはまるのって…やっぱ王子」

「なわけないだろツツツ！！！」

めくるめく妄想のセカイ。

怖ろしや、他人の想像力。

勝手に妄想されるのも鳥肌が立つほど嫌だが言っても聞かないので、せめてそういう類のものは個人の頭の中だけで完結して欲しい。

いや、この場合バカな雅人だけか…と思いついた凜だったが、実は教室内の生徒たちはみなその話に興味深々だったりもする。

……言わないだけで。

そんな視線になど全く気づかない様子の凜は、肘を付いてぼんやりと窓の外を眺める。

窓から流れ込んでくる生暖かい風に吹かれながら、凜はこれからのことを憂^{うれ}いた。

（早く…スッキリしたい）

淡海凜、16歳。

高校2年の夏はまだ始まつたばかりだった。

第一話（後書き）

誤字・脱字、評価・感想などありましたらよろしくお願い致します
m ((m

第二話

疾^とうに見ごろを終えた大きな桜の木の傍で、凜はいつものように昼休みを過ごそうとしていた。

通い慣れた道を通り過ぎ、そつと手を伸ばしてザラザラとした木の皮に触れる。

桜の木は目の前にあるものの他にいくつかあるが、一番樹齡が長そうなこの大木がお気に入りだった。

校舎から死角にあなっているのがさらに良い。

他人の視線を気にせずゆっくり過ごすことが出来る。

凜はどつしりと根付いた木の根元に腰を下ろし、ひんやりとする幹に背を預けた。

初夏を感じさせる暖風が、若干和らいだように感じる。

「はあ……」

騒々しい午前の空気からようやく解放された凜にとって、この場所は安らぎを与えてくれる特別な場所だった。

サヤサヤと揺れる風に乗って、凜の少し長めの前髪がふわりと流れていく。

コンビニで買ってきたパンには目もくれず、まどろむように瞼^{まぶた}を閉じた。

『お前が十七を迎える刻^{とき}までだ。それを過ぎたら、私はお前に関する一切のことを忘れよう……』

忘れられたくない。

自身は忘れてしまったのに、相手に忘れ去られてしまうことが酷く

怖ろしいように思えた。

どうしてだろう。

何故かはわからないが、早く思い出さなくてはいけないような気がする。

とても　　：とても大切な何かが、壊れてしまうような気がして。全ては直感がものを言っているだけなのに、早く早くと急かされる心に自分でも酷く困惑していた。

「サクラ色、か……」

薄紅色の風が舞う様が、銀色と混じって綺麗だった。

サラサラと流れる桜の花びらの中を踊るように揺れていた。

朱に染まった雪の中で、あの人と　　：

「え……？」

何が？

霞が掛かった記憶をもう一度手繰り寄せる。

今、何を思った…？

凜は軽く頭を振るけれど、一瞬過ぎた何かを捕らえることは出来なかった。

目の前には新緑の風と音が穏やかに流れている。

（朱色……？）

もう幾度も続いている消化されない疑問。

（…ダメだ）

思い出せそうで、思い出せない。

何度か続けてみたけれど、いくら考えても仕方が無いと諦めて、当初の目的を果たすべくコンビ二袋に手を伸ばした。

「ん、一度で二度美味しい『お好み焼きそばパン』はいつ食べて

も絶品だなっ」

炭水化物同士の組み合わせで、どうしたって栄養価は宜しくないのだが好きなものが好きなのだから仕方が無い。

これの他にも野菜たっぷりハムレタスパンとお肉重視のカツサンド、デザートにほんのり甘いクリームチーズパンが入っている。

小柄な凛の身体の、一体どこに収まっているのか不思議なくらい景気良く消化していく。

一人で食べるのはあまり好きではなかったけれど、友人たちと一緒に食堂なんかで食べたら量は足りないし騒がれるので嫌だった。

知らない先輩たちに声を掛けられるのも、ハーレム作ってバカみたいに騒いでいる鷹司の存在が視野に入ることも。

そんなことを気にして食べるよりも、思い出のカケラに残っていたこの桜の木を眺めながらぼんやりと過ごす方が断然良い。

そう思ってココで過ごすようになってから、少しずつではあるけれど、忘れかけていた何かを掴めるような気がしていた。

「やっぱり、俺は …」

この木が、好きだな…。

食べ終わった残骸を素早くまとめると、頭を木に預けながらそっと幹に触れる。

ざらざらした冷たい感触。

害虫駆除なんて明らかにしていなさそうなのに、一向に虫が湧く^わ気配がなかった。

もうすぐ夏なのに、ここだけがいつまでも春を残しているような雰囲気がある。

真冬なのに冴え冴えと花開いていた桜。

落ちる花のカケラと雪が舞って美しかった。

この木の傍にいと、その時の気持ちがい起こされるような気がして安らぎを覚えることが出来た。

ぼんやりと辺りを見回すと、一際濃い新緑の葉が周囲を覆い茂っていて荒んだ心を癒してくれる。

凜が揺れる若葉と小枝をぼーっと眺めていると、校舎のある方から人の気配がした。

「……？」

視線だけちらつと気配の方へと見やると、明らかに周囲とは違ったオーラを持った青年が現れた。

遠目からでもはつきりと分かる、スラリとした体躯。

背は高く、襟足が肩に掛かるくらい長めの銀髪がとても似合っている。

冷たく感じるほどクールな視線を宿した切れ長の瞳と、彫の深い顔立ち。

その圧倒的な存在感に息を飲みそうになってしまう。

（何で生徒会長がこんなところに…っ）

凜は以前からこの青年のことが苦手だった。

日本人には決してありえない銀の髪と、どこか他人を突き放したような雰囲気がある人に似ているような気がするから。

それに、生徒会副会長でもある鷹司と仲が良いというのも問題であった。

いつも一緒にいるわけではないが、彼がここにいるということは、鷹司もこの場所へ来てもおかしくはない。

なるべくならヤツに遭遇したくないという心理が働いて、自然と彼を見つけると脱兎の如く逃亡するのが常であった。

（くっそ〜っ、何で俺のお気に入りの場所に来んだよっ、他にも場所はいっぱいあるっていうのに！）

このあとのんびりとお昼寝タイムを満喫するはずだったのに、突然の来訪者に凜は慌ててその場から逃げ出そうとした。

が、がさごそと荷物をまとめている凜に気が付いた青年が、こちらへと一瞥する。
いちへつ

「げ。見つかった…っ」

ヤバイヤバイと焦りながらも急いでその場から離れようとする。

青年に罪は全くないのだが、どうしたって鷹司の存在が恐ろしい。少しでも危険を冒したくないという自己防衛本能が、とにかく逃げなくては、と頭の中はそれだけでいっぱいだった。

「…待つて」

不意に声を掛けられてぎよっとする。

話したこともない人間に声を掛けられたっていうのもあるけど、発せられた美声に純粹に驚いた。

一瞬でもドキツとして固まっていると、青年が凜の目の前までやって来ていた。

「キミ、淡海凜だよな？」

「そう…ですけど、あの」

「私は生徒会会長の華園 はなその 英だ。えい」

「いえ、それは知っています。そうではなくて、その…いつも鷹司副会長と一緒にいらっしゃるから」

「ああ、そういうことか。あいつならここにはいない。私一人だ」
「本当ですか！？それなら良かったっ」

はあ…と安堵の声を洩らすと、華園は少し目を睜^{みは}って驚いていたが、懸念^{けねん}していたことが杞憂^{きゆう}に終わってほつとしていた凜は気付かなかった。

（ああ、良かった、マジで。会長だけなら特に何も問題ないし。この人、綺麗過ぎて近寄り難いけど、別に悪い人じゃないしなあー）超・名門高校の生徒会なんぞやっているくらいだ。

さぞかし優秀であることは聞かなくても分かっているが、それでは何故こんな広い学校の敷地内でも端っこの方にある辺鄙^{へんび}な場所に彼がいるのだろうか？

ふと疑問に思っ^て華園の方を見上げると、思いもよらぬ優しげな瞳でこちらを見つめていた。

「でも、どうして会長がこんなところに？」

「私は時々、ここへ来るんだ。キミがいつも座^まっている、あの桜の木があるだろう？あの木を見ていると、不思議と気分が落ち着くん^だ」

「…！！」

この人、俺と同じことを思ってる…

自分が抱いていた不思議な感情を、同じように思ってくれている人がいたことに驚くのと同時に嬉しさが込み上げてきた。

見上げると、いつも冷たいと思っていた瞳がキラキラと輝いて見えた。

（この人マジ良い人っ！ううっ、何かスツゲエ嬉しいんだけどっ^っ）

うずうずとこの歓喜を表したい衝動に駆られていると、華園はそつと手を差し出してきた。

「凜と呼んでもいいか？私はキミをもっと知りたい」

「え？あつ、ハイっ！好きに呼んで構わないですよ、会長」

凜は差し出された手を取って握手を交わす。

外見によらず、その手のひらは大きくひんやりと少し冷たかった。

（何か…この学院に来て初めて先輩・後輩らしいことしてるぜ、俺…）

帰宅部である凜が上級生と関わることなど滅多に無く（鷹司は別として…）、クラスメイト以外とはほとんど接触を持たないので、この偶然の出会いを嬉しく思った。

「では、私のことは英と呼んでくれ」

「えっ…えっと…じゃあ…英…センパイ？」

「くくっ…呼び捨てで構わないのに。可愛いな、凜は」

「いえっ、天下の会長様にそんなコト出来ませんよっ」

握った手をそつと口元に持っていていかれ、手の甲を反してからかうように指先に唇を落とされる。

少し屈かがんで上目遣いに見つめられると、何故かドキリと緊張した。

（なっ…なんで俺ってば焦ってたんだよ！？）

くすりと吐息を零された手をバツと引いて、強引に華園の手から離す。

華園は気分を悪くすることもなく、クスクスと楽しそうに微笑んでいた。

「紅コウに知られたら怒られるかもな」

「え、何が…」

「どうやら私も、キミのことが気になって仕方がないようだ」

「はあぁっ！…！？？」

何言い出すんだ、この人は…？？

頭の中が疑問符だらけの凜には状況が正しく理解出来ない。
わたたと慌てていると、華園はそれ以上無理強いすることなく
距離を取った。

「それじゃあ凜、またな。もう少し一緒に居たいところだけど、生徒会の仕事があるから」

「あつ、はい。お疲れ様です…」

華園は中途半端な言葉だけを残すとそのまま校舎の方へと去っていった。

凜は数歩後ろに下がるとずるずると木の根元にしゃがみ込む。

（一体何を考えてるんだ、あの人…）

まさか華園もホモ…

いやいや、無いって！！

しかも何で俺！？

からかわれてるだけだったのっ！！

予鈴の鐘がなるまで、凜はしばらくその場で百面相をしていたのだ。
った。

第三話

俺ってば前世で何か悪行を働いたんだろーか…。

でなければ納得出来ない。

なんだって俺がこんな目にあっているんだろーか？

中学時代、成績は確かに中の下だった俺が、必死こいて勉強したおかげでこの名門校に入学出来た。

入学後もいつもギリギリだったけど、口は悪いが頭は良い雅人の世話になりながらも勉強してきたし、生活のためにバイトにも精を出してきたつもりだ。

それが…

それなのに、何で…

「ぷつ。お前、追試だったな？バツカで〜」

「うるさいツツ。お前のヤマが2割も外れたせいじゃねえかつつ」

「バカ言え。8割も当たってるのに何で赤点取るバカがいるんだよ」

最低限やっていれば70点は難^{かた}かったのに。と雅人に頭を小突かれながら、凜は理不尽な八つ当たりをしながら机に沈没していた。

本来、試験というものは己の力で乗り切るものなのに、当たると評判の雅人のヤマを当てにし過ぎた上に、そのヤマカケ部分の勉強すらも怠^{おこた}っていたので、もはや自業自得：なはずなのだが。

ああ、もうマジ最悪だ。

このままじゃ夏休み中の補習は免^{まぬ}れそうもない。

なんと言っても、前回の中間試験も散々で、赤点ギリギリだったのだ。

いや、正直に告白すると、幾^{いく}つかはアウトだった。

でも縫^{すが}る様な気持ちでそれだけは勘弁してくれと専任の教師にお願いしたら、『次回頑張れ』と言ってもらえたのだ！

だからこそ、頑張った…ハズだったのに…。

「淡海^{おつみ}…っ、今日こそは付き合ってくれるよね？」

いくつかバイトを減らさないとマジでヤバイ…

留年^{はじ}なんかしたらマジで一生の恥だっ。

いや、っていうかその前に学費が払えないぞっ！？

ああ、でもでも、夏休み中は超稼ぎ時なのはどうしてくれる…っ。
机に沈没しながら必死で頭の中で計算を繰り返す凜には、声を掛けられたことすら気が付かない。

声の主に気づいた雅人は、触らぬ神に祟りナシ…いや、この場合は人の恋路を邪魔するヤツは…っというわけで、そろそろ教室から出て行っただ。

同様に、同じクラスの連中も、好奇心ネコをも殺すということを承知しているようで、興味はあれど雅人と共にこっそりと部屋から出て行っただ。

そんな雅人や周囲の行動すらも気に掛けず、ひたすら云々^{うんうん}と唸^{うな}つてると不意に頭を撫^なでられる感触がした。

「何だよっ、俺は今、人生最大のピンチの真っ只中にいるんだっ。

お気楽極楽、お坊ちゃまで顔が良くてチョーシが良くてついでに頭も良いなんて詐欺師なお前とは違うんだよ…っ！っ！」

乗せられた手をパシリと払い除^のけて恨み言を重ねる。
ああ、本当にこれからどうしよう。

凜の中ではすでに追試すらも赤点を取り、せつかくの夏休み中に学校で補講を受けて教師に説教されている図が完成している。

お昼ごはんは基本的にバイト代で賄^{まかな}っている凜にとって、バイト代が減る…食事が減るという方程式が出来上がっているのだ。

たかがテストで赤点を取ってしまったがために飢え死になんて…っ！

育ち盛りな上に大食いな凜にとって、もはやこれは死活問題なのである。

他人が必死であれこれ考えている最中だというのに、なほ猶も楽しみに
人の髪を弄んでくる指先がうざったい。もてあそ

人がこんなに真剣に悩んでいるっていうのに……！！！！

「だあっ！もう、お前のせいだっつ。だからこの俺に昼飯奢りやがれっ！！」

悪戯を繰り返す指を掴んで、凜は雅人を睨みつけた。

「……!!」

しかし、いるはずの雅人は既にはいなく、代わりにニコニコと爽やかに微笑む甘い顔立ちの青年がそこにいた。

「妬けちゃうなあ。九条のこと、『お前』なんて呼んじゃうんだ？
それじゃあ、僕のこともちろん、紅コウって呼んでくれるよね」

「なっ……」

「ああ、淡海だけじゃ不公平だね？もちろん、喜んで僕もキミのことを凜と呼ぶね」

「……んでっ」

「さあ、遠慮しないで、僕の凜。安心して僕の胸に飛び込んでおいでっ！」

「なんでアンタがいんだよ————つつつ——！！！」

目の前でキラキラと輝くオーラを振り撒きながら極上の笑みを浮かべた。

なんでなんでなんだってコイツが2年の教室にいんだよ！？
いやいや、この際それはもうどうでもいい。

それよりも切実なのが、振り払ったハズの指先が自分のそれと絡め取るように重ねていることだ！

触れた指を撫でるように絡ませていく鷹司の行動に、凜の思考回路はパニック寸前だった。

：否、既に考えることを放棄してしまった。

考えるよりも先に手が出る凜は、動物的本能により空いている片手で鷹司の方を押し退けて距離を取る。

思いのほか簡単に拘束が解かれ、ようやく一息吐いた凜は訝しむように鷹司を見上げた。

「何なにナニ！？センパイっ、いったいどうしてなんだってこんなトコにいるんですかっ！！」

「まあまあ、凜。落ち着いて？それに、紅って呼んでくれる約束でしよう？」

「はああっ！？言ってますん、してませんっ、俺は絶対そんなコトいいませんっ！何かの間違いですよっ、白昼夢でも見たんですか！？ああ、そうですかお疲れなんですね。じゃあ俺なんかに構わずどつかのハーレムな連中でも捕まえてとっとと休んだほうがいいと思います！うんっ、俺にしては名案だっ。じゃ、そういうことで！」

一気に捲し立てて脱兎の如くその場から去ろうとしたが、鷹司は凜の手首を捕らえ反動を利用してその身体を自分の方へと抱き寄せた。片腕を腰に巻きつかせて、逃さないようにぎゅっと抱きすくめる。

鷹司の胸に頭を押し付けられた凜は、真上から降り注ぐ視線に不覚にもどきりとしてしまった。

じっと見つめてくる鷹司の瞳。

色素の薄いグレーの瞳が、もどかしげに揺れていた。

神に愛された作り物のような綺麗な顔立ち。

一見冷たく見えるその顔は、甘く人懐こい笑顔と柔らかく揺れる薄茶色の髪が彼の魅力を惹き立てていた。

それが、今は。

「どうしてそんなに僕を避ける？」

「……っ」

そつと耳元で零れるような吐息に乘せて囁く。

切なげな表情が、凜の心を惑わせていた。

掴まれたままの手首が熱い。

鼓膜を震わせる甘い声が、優しく脳に侵入してきた。

なんで。どうして。

今までただ、からかうようにしか接してこなかったのに、どうして急にこんなことをするのだろう。

そして、振り払ってしまえばいいのに、どうして自分はただバカみたいにコイツのことを見ているんだろう。

鷹司の空気に飲まれて、凜は動くことが出来なかった。

「あ……たりまえ、じゃないですか」

「なんで」

「オトコの自分に、ヘンなこと言ってくる人を避けるのは、フツーだと思います」

「ヘンなことって……こういうこと？」

少し不機嫌な声音を吐いて、鷹司が顔を近づけてくる。

あつと思つた時には、その薄い唇が凜のものと重なっていた。

僅かに触れただけですぐに去ってしまった感触が、何を指すのか理解したくなかった。

信じられないものを見るかのように瞳を大きく開かせて、ただその整った造形を見つめていた。

「…………っ」

「ちょっと意地悪…しすぎちゃったかな」

固まったままの凜をそつと離して、その身体を自由にした。

鷹司は名残惜しげな表情かおを一瞬だけ見せて、すぐにいつもの軽い顔に戻る。

「今度の補講、僕がやるんだ。そのお知らせに來ただけだよ。ちゃんと参加してね」

何事も無かったかのようにブレザーのポケットからプリントを取り出すと、凜の机の上に置いた。

未だ呆然と立ち尽くしている凜に、その声が届いているかは分からなかったけれど、鷹司はそのまま教室から出て行ってしまった。

一人残された凜は、鷹司が教室のドアを閉めるとともにずるずるとしゃがみ込む。

頭を抱えるように蹲うつすくまつても混乱は治まらない。

「何なんだよ、もう…っ」

赤点に、追試、バイト代減額によるお昼ごはんに夏休み返上。

そして……キス。

「最後はぜってー俺のせいじゃねえ…」

人生史上最低で最悪な一日は、どうかこれで終わって欲しいと切実に願っていた。

第三話（後書き）

誤字・脱字がありましたらご報告いただけると助かります。

また、評価・感想などがありましたらお気軽にお願い致します！

ちょー亀更新で申し訳ないのですが、頑張っていこうと思います♡
よろしくお願い致しますm（＿）m

第四話

シンと静まり返った教室の中で、落ち着いた声だけがたおやかに流れている。

ホワイトボードの前に姿勢良く立った青年は、穏やかな笑顔をそのままに珍しく真面目な表情を覗^{のぞ}かせていた。

凜は流麗な彼の顔を見ないようにして、ボードに書かれた内容と補講用に配られたプリントを食い入るように見つめていた。

（こつち来んなこつち来んなっ！ってゆーか俺を見るなツツ）

3日間の補講の後、再試験を実施して合格すれば見事無罪放免。しかし、凜にとってはそれどころの状況ではなかった。

「どこが分からない？」

優しいな声音で自然に声を掛けてくる。

けれどそれは上級生として、そして教える立場の者としての態度だった。

先日までの親しげな（図々しいとも言っ…）空気は何処にもなく、その身に纏^{まと}う雰囲気は、彼が本当に有能な生徒なのだということを嫌というほど思い知らされる。

ただ綺麗なだけでは、この学院の生徒たちをまとめることも慕^{した}われることもないのだと改めて実感させられた。

（ああもうホントやだ。何なんだよこの人…っ）

何でこの人は俺なんかに構うのだろう。

もつと可愛くて素直で、頭の良い人がこの学校にはたくさんいるのに。

凜は濡れたように流れる漆黒の髪をくしゃりと握りしめた。

『お前にはこの黒髪が良く似合うな』と、あの人がよく褒めてくれた。

大きな手でからかうように撫でてくれていたっけ。

そんな断片的なものは時折思い出せるのに、肝心なことが何一つ思い出せなかった。

鷹司の態度も核心を突くようなことは何一つしていない。

ウソのような甘い言葉と、事故のような…キス。

だからこそ苛立つてしまう。

まるで自分を、嘲笑あざわらひっているかのように。

「いえ…大丈夫、です…」

少し不機嫌な様子で答えた凜に、彼はそれ以上追求してこなかった。

「やっぱりダメだった……」

職員室前でがつくりと項垂うつたれた凜の手には、『不合格』の通達のプリントがあった。

朝、担任から呼び出されてまさかと思ったが、案の定な結果だったのだ。

彼の授業はとても分かりやすかった…ように記憶しているが、如何いかんせん、彼の動向が気になって気になって仕方がなく、ろくに頭に入っていないかった。

「も…ヤダ……」

マジ自分探ししてる場合じゃねえ…。

凜は思わず頭を抱えてしゃがみ込んでしまった。

「はあ……」

このままでは押し迫る現実に負けてしまう。

不合格者には（と言っても凜しいくない）生徒会室でお説教ならぬ、特別講習がある……らしい。

担任から笑われながら渡されたプリントには、テスト結果と今日の放課後に生徒会室に来るようにとしか記述されていない。

生徒会室と言えば、例のちょっと妖^{あや}しげな生徒会長と、最近の悩みのタネの元凶である鷹司がいるではないか！

ああ、行きたくない。

このまま逃亡しちまおっかなあゝなんて誘惑に駆られるけれど、サボったが為に後日バイトする時間をもっと削られるのはマズイ。潔くササツと行ってとっと怒られて逃亡するか、このままエスケープしちまうか。

両者のメリット・デメリットを考えながら云々^{うんうん}と天秤が揺れる。

こんなに一所懸命に考えるくらいなら、最初から真面目に勉強していれば良かった。

今更そんなことを思っても、後の祭りなのだが。

そう思わずにはいられないのが人間の性^{さが}ってヤツなのかもしれない。

「ま、いいや。後悔してたって仕方ないし」

フンっと思い切り良く立ち上がると、諦めて最後の審判へと進むことにした。

お説教だけなら、お昼^ごコハンは食べれるし、今まで通りあの人を探^{さぐ}れる。

もしも夏休み返上で補講なら……

その時考えよう。

とにかく今は、何が何でもココを突破して、冬の自分の誕生日までには思い出さなくてはならないのだ。

ここで無駄に考えている時間のほうがもったいない。

そう思い直すことにして、凜は生徒会室へと向かった。

コンコン。

近頃いろいろと疲れていたこともあってか、少し投げやりな気持ちになりながら凜は軽くノックをした。

豪華な扉の奥からは、明るい声が聞こえる。

「どうぞ」

軽い調子はどこかあの男に似ているが、声が全く違う。

女の子の声だ。

生徒会に女生徒なんて居たのだろうか…？

そんなことを不思議に思いながらも、凜は警戒するようにゆっくりと扉を開けた。

「失礼しま……！？」

「わあああああーつつ、ホントに凜ちゃんっ、凜ちゃん凜ちゃんっ、愛しの凜ちゃんどわあああああ……！！！」

「はっ！？」

ぐはあああつつ！！！！？」

扉を開けると共に奇妙な言葉を発して突撃してきたモノとぶつかる。待ち遠しかっただのもう離さないだのワケの分からない言葉を夢中で騒ぎ並べ立て、小柄な凜よりもさらに小さな身体に似つかわしくない怪力でぎゅうぎゅうと抱きしめてくる。

息苦しさ^{あえ}に喘ぐけれど、少年は凜の様子などまったくお構いなしでその馬鹿力^{なあ}で^{なあ}凜に抱きついていた。

「ぐっ…苦し……っ、おまつ、何なんだ、よっ！？」

「クンクン…はあ……っ、これが待ちに待って憧れた凜ちゃんの匂いなんだねっ。ああ、もう、ウツトリし過ぎちゃって食べちゃい

たいくらいだよ~~~~うつっ！ホント、魅惑的でデンジヤラス、
それでいて甘美な香りなんだろっつ！！！」

「なっ、何意味分かんねえこと言っただよ！とりあえず俺から離
れ~~~~うつあっつ」

「り……ん、ホント、ずっと待ってたんだよ」
「ツツ！？」

それってどういう……？

少年の発した言葉が気になって、苦しいのも構わず彼を見つめてし
まう。

憂^{うれ}いを帯びたその表情^{かお}は、少年という年齢よりもずっと大人びたよ
うな表情をしていた。

しかし、急に元の子供のように顔を膨らませて不機嫌そうになる。
それと同時に、圧迫されていた身体が解放されるのを感じた。

「待っていたのはお前ではなく、私だ」

「うつつぎゃああっ！？なっにすんのさ英^{えい}クン！！！」

「……ふう、お前は留守番もろくに出来ないのか……。後で紅^{こう}に苦情を
出して置かねばならぬな」

「ひええええッッ！？やめてやめて、それだけはお願ひ勘弁して
ッッ。こんなに可愛いボクを虐めるなんて何てヒドイ男なんだよ英
クンはっ！！この鬼っ！鬼畜っ！！むっつりスケベの人でなしいい
い~~~~っつっ！！！！！」

「何だと？お前の主^{あま}の方がよっぽどむっつりスケベの人で無しでは
ないか。そこまで言うのなら、お前はよほど私に仕置きされたいら
しいな」

「いいいいぎゃあああああ~~~~っつっ！？」

目の前で繰り広げられる展開に思考が付いていかない。
とりあえず、華園が自分を助けてくれたのだということとはかるうじ

て分かった。

何故なら今現在も、突撃してきた少年の首根っこを掴んで片手でぶら下げているからだ。

（会長って…力持ちだったんだ……）

なんてトンチンカンなことを真っ先に思う程度には混乱しているらしい。

断末魔のような悲鳴が部屋の中を木霊こだましていたが、華園が少年を部屋の奥の扉へと放り投げ、少し経つとやがて声が鳴り止んだ。

「ふう…まったく誰に似たんだか、煩くて敵わない」

部屋から出てきたのは華園だけで、手をパンパンと叩くはたとようやく思い出したかのようにこちらへと向き直った。

「お待たせ、凜。こっちへおいで。お茶でも入れてあげよう」

「えっ！？あつ…、ハイ」

何事も無かったかのように麗しい笑みだけを浮かべて凜をソファへと促すと、華園は備え付きの簡易キッチンの方へと向かった。

「うわ…ふかふか」

上質な皮張りのソファに腰を下ろすとゆっくりと身体が沈んでいく。その少し落ち着かない感触と戯たわむれていると、やがてキッチンの方から食欲をそそる良い匂ただよいが漂ってきた。

（ああ…そういうば、収入激減を想定して今日はお昼食べてないんだった…）

ぐぐぐう…とお腹の虫が自己主張をし始める。

あんまりにも鳴るものだから華園に聞こえないかとちょっと心配になってしまった。

（アイツといてもそんなこと考えたりしないのに…）

いやいや、そんな状況に陥ることを想像するほうがもっとイヤだ。でもどうして会長の前では恥ずかしくないようにしたいって思うのだろう？

学院一の人気を誇り、さらには学内トップの頭脳と家柄、そして自身の圧倒的な存在感を併せ持つ『一般庶民ナメてんじゃねーよ』的な人間がいたら妬み^{ねた}やかみ反感を買いそうなもののに、ことこの華園英に関してはそれが全くない。

いかにもなセレブ嫌いの凜も、何故だか彼のことは好印象である。先日のことを抜きにしたとしても。

すっげー金持ちだし美形だけど自分にはあまり関係ないから嫌いではない、と思うこと事態が、既に彼を特別視しているように思えた。そんなことをぼんやりと考えていると、やがてトレイを持った華園が音もなく静かにこちらへと歩いて来ていた。

「凜？どうした。今日は少し暑いからアイステイーを入れてみたんだが、紅茶は飲めるか？」

「えっ、あ、ハイ。ありがとうございます…」

会長と紅茶って、何か似合わないよな…。

なんて、ストローの刺さったグラスを受け取りながらふと思う。

クールな印象の華園は、何となく夏でもホットコーヒーをブラックで飲んでいるようなイメージだった。

慣れた手付きでポーションとガムシロップが入った小さなカゴまで用意しているのを見ると、こういったことは日常茶飯事にしているのだというのが分かる。

「腹は減っているか？スコーンを焼いたんだが、良かったら遠慮なく食してくれ」

「本当ですかっ！？」

実はめっちゃお腹空いてたんです……と洩らすと、華園はもう一度キツチンの方へと向かい、今度は軽食まで作ってくれた。

凜は、どうして自分はこの部屋へ来たのかすらも忘れて、美味しい食事と華園との刺激的な話でしばらくの間楽しんでいた。

[illegible]

少年の嘆きが聞こえてくるまで、二人はすっかりとその存在を忘れていたのだった。

第四話（後書き）

物凄いカメラ更新で申し訳ないです…。

それでもお付き合いくださっている方、本当にありがとうございます！！

ああ、それにしてもファンタジー要素が出てくるまでの前フリが長すぎる…orz

第五話

新月の夜、静かに3つの影が闇に堕ちている。

僅かな星の光に照らされた者達は、人目を忍ぶようにそつとその場に舞い降りていた。

そのうちの一つがそつと片手を伸ばして大木に触れると、新緑の葉が鮮やかな朱色の花びらに染め変えられる。

夜風に揺られて流れる銀の髪と、闇に浮かぶ二つの瞳。オッドアイ

この世のものではない美しさに、二つの存在は支配されていた。

「このままで、本当に……いいんですか……？」

「……………」

「貴方らしくもない。ずっと……この時を、待ち望んでいたではないか」

二つの存在に、その者は答えない。

支配する者はそつと瞳を伏せると、悲しげに微笑みを浮かべてみせた。

「あの約束は……果たされてはならぬのだ」

鼓膜を震わす美声と零した吐息は、やがて溶けるように闇夜の中に消えていった。

「どおーも……つ、生徒会書記のつ、しりゆっいん かなめ四柳院叶芽クンです……す……つ……！」

！
」

因みにこう見えても3年生だよつ、と先ほどから異様なほどテンションの高い少年が部屋から出されるなりいきなり自己紹介を始めやがった。

俺はというと、天使みたいな顔をした少年の姿と中身のギャップの激しさに呆気に取りられ、会長が隣にいるのも構わずにポカンと見つめてしまった。

（な…何なんだよ、コイツ…）

ふわふわと波打つ金色に近いクルクルの髪。

大きな碧いの瞳が可愛い顔に良く似合っているが、無駄に高いテンションと奇妙な行動が全てを台無しにしていた。

「生徒会つて…顔で選んでるんだっけ…？」

いやいやそんなバカな。

仮にも天下の桜華学院。

みてくれだけでどうにかなるような場所じゃない。

しかしながら、さつきから人の身体を好き勝手にぺたぺたと触ってくる四柳院に、俺はソファに座ったまま会長を盾にして匿^{かくま}ってもらっていた。

会長はと言うと、そんな俺の様子を楽しげに見守っている。

（あのお…見てないで、ちょっとは俺を助けて欲しいんですけど…）
とりあえず壁にはなってくれているので良しとしておこう。

あまり多くを望むのは何事も良くないしな。

俺は天使のような小悪魔…いや、この場合はじゃじゃ馬^{エンジェル}天使？を適当にあしらいながら、この部屋に入る前から気になっていたことを会長に聞いた。

「あの…会長、俺…やっぱり補習ですか？」

「うん？なんのことだ？」

「いや、だからその…この間の追試、ダメだったから…。それで俺呼び出されたんですよね？」

「ああ、そのことか。凜は元々賢いんだ。どうせ今回だって、紅のヤツがキミの邪魔をしたんだろ？」

「いえいえ、とんでもないですっ！何だってそんなこと…っ」

確かに鷹司が講師だったから集中力を欠いていたかもしれないけど、俺が賢いなんてとんだ大間違いだっ！

天才がうじゃうじゃいる中でも平然とした顔でトップを取るような人とは元から頭の出来が違うのだ。

一緒に居ることさえ恐れ多いのに、「賢い」なんてありえないっ！！

俺は心の中で超絶叫びまくっていたが、華園にはちつとも届いていない。

「分かってているよ」と優しく頭を撫でられて、クールな容姿を少しだけ柔らかくする。

（うわ…っ、めっちゃ貴重なモノを見てしまった…っ！）

一瞬の出来事に俺が驚いていると、華園はすぐに元の冷たい表情に戻してすっと立ち上がり、シカトしまくっていた四柳院の首根っこを掴んだ。

「うひゃああっ、何すんだよ！英クンツッ」

「少しは静かに返事が出来ないのか、お前は。いいからアイツを呼んで来い」

「何でボクが…っ」

そんな体勢だったら誰だって文句を言うだろうに、会長は態度を変えたりはしない。

四柳院に悪気はないのだが、助けてやる義理もないので俺は傍観を

決め込んだ。

何ていうか…一瞬で、空気が変わったような気がしたから。

「行くよな、叶芽？でないと……」

「ひゃっ、はいいいひひひっ」

案の定、華園が四柳院の耳元で何かを言うと（きっと何か脅したに
違いない）、四柳院はそれこそ脱兎の如く部屋から飛び出していっ
た。

「さて。これで漸く邪魔者が居なくなつたな、凜」

「ふぁいつ？」

扉が閉まると同時にこちらに振り返つた華園は、身体の芯から凍え
るような不敵な笑みを浮かべていた。

「さあ、始めようか…」

第六話

拝啓、天国にいるお祖母様。

お元気でいらつしゃいますか…？

お祖母様が俺にたくさんのお愛情を下さっていたことを、俺は今になって身に沁みて実感しています。

だけど、ごめんなさい。

俺はもうすぐそちらへと旅立ちます。

こんなに穢けがれてしまつては、お祖母様に会えないかもしれないけれど…もうこんな拷問しごもんには耐えられそうもありません。

まだ十分に供養出来ていないかもしれないけれど、不出来な孫を許して下さい……。

（俺の人生も、ココまでか……。ああ、あの人の約束も果たせなかった…）

凜は広い生徒会室という密室で、華園に追いつて立っていた。

他にも席はあるのにもかかわらず、ソファに腰を掛けていた凜のすぐ傍にまで寄り添って座り、先ほどから執拗しつようなまでに攻め寄ってくる。

凜は逃げ出すことも出来ず、かと言って助けを求めることも出来ず、ただ与えられるがままに華園によつてもたらされるものを甘受かんじゅしていた。

「ほら…凜、可愛い手がお留守になつていぞ。もっとしっかりと動かさないと駄目だろう」

「や…かいちょ…もう、無理です…っ」

「もう降参か？まだまだイケるだろう…？それに英えいと呼べと、何度教えたら分かるんだ」

「んっ…英センパ…ごめんなさい…俺…ちゃんとするから…だからもう…あっ」

華園の攻めは容赦ない。

少しでも早く終わってくれるように願うしかない凜は、現状の責め苦に耐えるしか他に術^{すべ}がなかった。

どれだけでも解放されない苦しみ。

華園ほど経験豊富な男なら、それくらい分かってくれているハズなのに。

「もう…ダメ…僕の凜に何やってんだよえー…いッッ！！」
「…っ！？」

その時突然扉が豪快に開かれ、飛び出てきた鷹司が華園に向かつて叫び散らした。ズカズカと部屋の中を横切ると、華園の隣に座っていた凜を横から奪い取る。

華園の悪手から守るようにぎゅっと抱きしめると、不機嫌な表情を隠そうともせずに華園を睨みつけていた。

「凜？大丈夫か…っ？英の野郎に何されたんだ。触られたとこ全部僕に教えるんだ！僕が全部消毒してあげるからね」

「えっ…？は、ハイ…？」

「ねえ、何処…？首？胸？お腹の辺り？それとも…」

「なっ…ちよっ、アンタどこ触ってんですかっっ！！？」

確かめるように身体中をあちこち触れてくる鷹司の手。

目元の辺りから頬、首筋、鎖骨の辺りへと徐々に降りてくる冷たい感触。

制服のシャツを捲^{まく}って腹の辺りにまで及ぶと、さすがに凜も焦^{あせ}った。心配^{かお}そうな表情をしてるくせに、言ってることとやってることがま

るで違う。

かと言って、誤解を解こうにも全く人の話を聞いてくれるような状況でもなかった。

「ちよっ…センパイっ、止めてくださいっ。何ヘンな勘違いしてるんですか…っ」

「勘違い？じゃあ何、凜は合意の上で英なんかとしてたってわけ？僕が1年もずっと口説いてたって見向きもしなかったくせに、英には簡単に許しちゃうんだ、凜は？」

「何ワケ分かんないコト言ってるんですかつ。合意って言つか…じゃなくちゃ俺、退学になっちゃうかもしれないし…仕方ないじゃないですかっ」

「何だって！？英、お前いつからイタイケな少年を脅すような愚者に成り下がったんだ！？」

「さあ…何のことかな」

「はあ！？だから違うんですってば！！」

「ダメ。僕の言うことを聞かない凜なんか知らない。いいからこっちにおいで」

「うわっ」

グイと凜の肩を引き寄せて強引に立ち上がらせる。

その時、ガタンとテーブルに凜の足が当たり傍そばにあった書類がバラバラと大量に床に散らばってしまった。

「ああーーーーっ！っ！！！」

それを見た凜は驚愕きょつがくした。

この数時間の間に耐えてきたこと全てが、ほとんど無に帰きしてしまっただけだ。

「え？何ナニ？」

「あーあ……確実に嫌われたな、紅。ククツ、私としてはその方が
良いのだがな」

「は？え？何で僕が凜に嫌われなきゃなんないの」

何のことやら全く状況を理解出来ない鷹司とそれをからかう華園。
そんな二人のことなど最早視界にすら入っていない凜は、これまでの
苦労を思っただけ泣けてきた。

しかしそれ以上に、己の努力を水の泡と化した鷹司への怒りが沸々
と湧き上がってくる。

「せっかく頑張ってたのに……俺の苦労が……っ、何で何だ
よ……なんでアンタはいつも俺の邪魔ばかりすんだよ……っ。俺、
アンタに何かしたのかよ？念願叶ってようやくココに入学出来たと
思ったのに、登校初日から追い掛け回されるわ全校生徒の見世物パ
ンダにされるわで散々だしっ！」

「えっ、ちよっ、凜、待つ……」

「夏休みに補習をやらない代わりに資料整理やってたっていうのに
アンタが勘違いして滅茶苦茶にしちゃうし！やっともうすぐ終わり
そうだったのに、どうしてくれんだよツツ……！！」

切羽詰った凜は敬語を使うことすらも忘れて鷹司に激昂げきうしていた。

テーブルの上に乗せられていた大量の資料。

最早原型を留めていないほど無残に散らばってしまっている。

これは2学期に行う文化祭の予算案や模擬店の規定、安全面の考慮
などといった様々な資料が取り揃えてあった。

凜はこの膨大な量の資料を読み、内容を理解した上での確に仕分け
ていたのだ。

内容によって注意を促す対象違うからだ。

生徒側が気をつけなければならぬこと、学校側が考慮しなければ

ならないこと、またはその両方が互いに善処しなければならないことや要望事項などなど。

あまり賢い方ではない（と自分では思っている）凜にとって、この作業は苦痛を極めていた。

どの観点から考えなくてはならないのか。

それと同時に考慮しなければならぬことは何か。
付随する項目はどれか。

普段、頭を使わないのに珍しくフル回転していたため、すでに思考回路は限界だったのだ。

でもそれももう少しで終わりだったハズなのに…。

「……………」

大きな黒い瞳にうつすらと光るものが込み上げて来る。

わなわなと震える唇を堪えて、ぎゅっと目の前の憎い男を睨み付けた。

「……………んたなんか…っ」

「り、ん…？」

「アンタなんか…っ、だいつきらいだ

ッッ！！！

！！」

本能のままに怒りをぶちまけると、凜はそのまま部屋を飛び出してしまった。

ボタンッ！！と激しく扉が開かれると共に消えていく凜。

戸惑う鷹司に、華園は軽蔑するような冷たい視線を送っていた。

「ククッ…泣きそうないつも美味そうなものだな」

「なっ、ダメだ！アレは僕のだ！！」

「まだお前のものにはなっではいまい。むしろ、アレが私を選ぶ可

能性の方が高いと思うのだがな。それにお前は、諦めるのでは無かったのか？」

「…っ、ホンツツトお前って嫌なヤツだな」

「お前が煮え切らないからだ」

ふつと楽しいな笑みを浮かべると、思い出したかのように開け放たれたままの扉に視線をやる。

すつと凜が去っていった廊下の奥を見つめると、今にも地団駄じだんだを踏みそうな顔をしている相方にささやかな助言を送った。

「早く追いかけていいのか？今頃きつと泣いているんだろっな… どうかの誰かが馬鹿な勘違いをしたせいで、せっかく私の扱しきに耐えてこなした課題を無為にされてしまったのだから。泣き腫らした顔のあの子は特に可愛いんだろっ。あの子を狙けだものう獣が、また増えるんだろっな」

まあもつとも、お前にはもう関係の無い話だったな…と続ける華園の言葉に、鷹司がぴくりと反応を示す。それでも何かに耐えるようにその場から動き出さない相方に、華園はさらに容赦なく言葉を浴びせていく。

「やはり…お前なぞにアレは勿体無い。元々は私の獲物だったのだ。幸い私はアレに好かれていているしな…私が貰い受けるのが筋つてもものだろう。私が優しく慰めてやれば、アレもすぐに私に身を委ねるであろっしな。それこそさっきお前が想像したようなことを、だ」

「く…っ、お前ぜってーわざとだろ！」

「さあ…何のことだ？」

しれつと涼しげに答える華園に、鷹司はますます苛立ちを覚えた。最初は見向きもしなかったくせに。

初めに目を付けたのは自分なのだ。それなのに、我が物顔であの子の傍にいるこいつが許せない。

そして、自分よりもこいつといることを望む凜が何よりも憎らしかった。

「凜……………」

「仕事の邪魔だ。さっさと行って来い」

「お前が呼び出したくせに」

「叶芽は？そっちに行かせたんだが」

「ウザかったから埋めてきた。」

「またか…哀れな僕^{しもへ}だな」

「あいつが勝手に付いて来るだけだ」

「ふっ…嬉しいくせに。素直じゃないな」

お前ほどじゃない、と続けようと思ったが、冷やかな瞳の奥に実は怒りの色が混じっていることに気が付いて止めた。
これ以上怒らせるのは得策ではない。

「…出かけてくる」

「ああ、そうしろ。土産も忘れるなよ」

「知るか」

ぶつきらばうに言い返すと、そのまま部屋を出て行った。

華園はふうとため息を零して扉の向こうに消えていく相方を思う。

「本当に…」

不器用な人だ」

第七話（前書き）

もの凄く遅くなってしまう、申し訳ございません。

第七話

もう最悪だ…！

ココを受験する時と同じくらい必死で頑張ったのに、全てを無駄にされてしまった俺は絶望に打ちひしがれていた。

怒りと悲しみのあまり飛び出てきてしまったけれど、結局のところ行き着く場所はいつもの桜の木の下だった。

幹の隙間に挟まるような形で座り込み、膝を抱えて零れ落ちてくる涙を隠す。

補習を免除されることによって生活の心配をしなくて良くなることよりも、課題をこなしていくことの達成感の方が嬉しかった。

ただ今は単純に、努力した成果を無為にされてしまったことが悲しかった。

自分が今、この学院に来てこうしていることさえも嘲笑あざわらわれているようで…。

「何で俺は…何も出来ないんだよ…つく…っ」

あの人に会いたい。

いるかもどうか分からない人を求めるなんて自分はどうかしているって分かっているのに、それでも欲してしまう心を止められなかった。

…あの時と同じだ。

大切な思い出を失ってしまった瞬間に感じた、どうしようもない寂しさ。

あの人を失って、記憶まで無くなって…。

心の何処かが、いつも空虚に満ちていて不安だった。

だからこそ、今出来ることを精一杯にやってきたつもりだった。

自業自得とは言え、ああやって目の前で崩れ落ちていくものを見る

と途轍もなく堪らない気持ちになる。

最初から何もなかったかのように。

何をして、結局は無駄だと言われているようで。

全ては泡のように弾けて消えてしまふような気がして。

「う…つく…こんな事で…ひつく…泣いてる場合じゃ…ない、の…」

それでも口の端から零れてしまう嗚咽おえつを止められない。

後から後から止め処なく溢れてきてしまう。

子供のように泣きじゃくるなんてって思っても、込み上げてくる意味不明な熱いモノをどうにかするなんてこと…出来なかった。

誰でも良い。

あの人でないなら誰でも同じなんだ。

少しでもいいから…誰でも良いから、温もりが欲しい

「…」

そう切に願った瞬間、その思いは叶った。

そっと背中せうに回された腕。

初めは驚いてぴくりと身体を震わせてしまったけれど、徐々にしっかりとしていく力強い抱擁に安心感を覚え、俺は強張っていた身体から力が抜けていくのを感じていた。

ゆっくりと頭を上げると、目の前には同じ色のタイを身に付けた制服が視界に入ってきた。

顔を見ようとさらに視線を上げようとしたが、胸元に引き寄せられて強く抱きしめられていた。

「あ…」

トクントクンと聞こえてくる鼓動。

服の上からでも感じる、温かい体温。

抱きしめられた腕の温もり。

まるで何かから守るように優しく抱く^{いだ}その人の匂いに、俺は何処かで既視感を覚えていた。

「ま……さ、と？」

そんなまさか、と思いながら小さく名前を呼ぶと、回された腕がぴくりと反応を示す。

確かめるようにその胸に腕を伸ばすと、さらに強く抱きしめられた。

「大丈夫……俺がいるよ。お前は何も……不安に思うな」

「でも俺……」

「いいから……このまま大人しく抱きしめられてろ」

そつと耳元で囁かれるテノール歌手のように涼やかな声。

いつも聞き慣れているはずなのに、どこか甘さを含んだ音が優しく鼓膜をくすぐった。

俺はその胸にコツと頭を預けて、全てを雅人に委ねる様に甘えることにした。

今はただ……何も考えないでいたかった。

「うん……ごめん、雅人」

「……」

雅人はそれには答えず、ぎゅっと抱きしめる腕に力を込めてきた。俺は子供みたいにその温もりに縋りついて、言われるままに雅人の胸に顔を埋めるのだった。

「落ち着いたか？」

「ん…」

雅人はポンポンとあやす様に俺の背中を叩いた。

どのくらい時間が経ったのだろう。

そんなに経っていないような気もするけれど、何時間も経ったような気もする。

俺はようやく気持ちが落ち着いてきて、そっと吐息を零した。見上げるように様子を伺うと、雅人の態度はいつもとは全然違っていただけだからかうようにニヤリと笑った顔はいつもと同じだった。

端正な顔立ちから時折見える八重歯が可愛いのにカッコイ。

(ほんと、神様って不公平だよな…っ)

ちよっと恨めしく思いながら上目遣いについ睨んでしまう。

「ん？何だよ？親友様に向かってそういう顔するかあ？」

「いひやつ、にやにすんにやつ」

「お前の可愛い顔を、もっと可愛くしてやってんだよ…このっ、ちつとは俺の苦勞を思い知れっうりゃうりゃ」

「にゃんだとましゃとのくせにいいいいいっ」

俺のほつぺたを引っ張りながらじゃれてくる雅人に応戦。

って、マジ痛いんだっての！ちよっとは手加減しやがれてんだっ！

普段は身長差でリーチが足りなくて負けるけど、今はかなりの超接近戦。

ヤツが顔なら俺はココだ！！

…こちよこちよこちよこちよこちよ

「うひゃひゃひゃひゃつ、ちよつ、おまつ…やめれ…っあはっ、あははははは…!!」

「うっしやいつ、おみゃーにゃんかこおだこのっ、にゃんでそんなデケーんだよ…っ、ひよつとはおりえに寄こしええーっっおりゃおりゃあああぁゝゝ!!!!!!」

顔が良くて頭が良くて金持ちでついでに性格も良いなんてありえねえ…!!!

俺は日頃から感じていた理不尽な（八つ当たり上等的な）気持ちをぶつけるかの如く、雅人のわき腹をくすぐりまくった。

なんでなんでなんだって俺の周りはこちらも理不尽で不平等でヒイキに満ち溢れてんだッツ!!

身長だつて平均以下の167センチだし、顔もフツーだし頭に^{いた}至つては再追試。

唯一誇れるのはこの新月の夜よりも真っ黒な髪くらいだ。

それも、オトコだからあんまり人に自慢出来たことじゃない。

個人的には気に入ってるからいいんだけど。

「おまつ、マジやめれっ…んな可愛い顔してつと襲うぞ!!」

「はあ!?!だから俺が可愛いとか言うな!!お前マジ頭どつかイカレてんのか!?!眼科行け眼科!」

（…お前がそんなんだから苦労するんだよ）

「何か言ったか!?!」

「いーえ?」

にこにこ満面の胡散臭そうな笑みを浮かべる親友に、何かわからんがム力つく。

ぜってーこいつ、腹で何か考えてんな…。

俺はいぶかしむように雅人の顔を覗き込むと、不意に頬を^{つま}抓んでい

た手がするりと後頭部の方へと寄せられる。

……？

「なに…？」

「いーや？何でも？」

「…嘘つけ。何か企んでんだろ？お前がそうやって、胡散臭そうな笑いつける時はいつもそうだ」

「うさんくさって…ヒドイなあ…俺は一応、キミの友人のつもりなんだけど？」

「こんな友達を持った覚えはないっ」

「ヒドッ！今は傷ついた！本気で悲しくなつたぞ俺は！！」

「ふふっ…」

意地の悪い気持ちになつた俺は、雅人にいたずらを仕掛けようにとヤツの耳元に顔を寄せて言つてやる。

「ばーか、友達じゃなくて、親友…なんだろ」

からかうように普段じゃ絶対言わない臭い台詞セリフを零すと、雅人は面白いうに固まつた。

放心した顔でかちーんっと硬直するヤツを見るのはこれが始めてだ…そんなに驚くようなことか？

自分でやっておいてなんだが、笑を取るつもりだったのに。

「もしもーし、まーさーとークーン？」

ツンツンと顔を突ついても何の反応もない。

ちえ、つまらん。

まあいいや。

とりあえず、こいつのおかげで何に悩んでいたのか忘れた。

時折、どうでもいいことで凄く悲しくなったり、泣きたくなったりすることがある。

そんな時、落ち着くまで一人で泣いているのが通例だったけど、今回は雅人のおかげですぐにスッキリしたし、どこか安心した。

「ありがと、な」

聞こえないようにそつと言って、ばちーんと雅人の頬にビンタをかましてやった。

「んなつ…凜っ!？」

「いつまで呆けてんだよ、バーカッ。先に戻ってるからなっ」

恥ずかしさを誤魔化すために、そのまま雅人の傍から離れて飛び出す。

一先ず教室に戻ろうと、校舎の方へと駆け出した。

後ろから俺を呼ぶ声が聞こえてきたけど、そんなもんは無視だ無視。

「でも…マジ助かった、かな」

「何が助かったの？」

零した独り言に返事が返ってきてびくつとする。

不意に顔を上げると、そこには不機嫌な表情を露わにした王子が立っていた。^{あら}

「ねえ、凜…。キミはいつたい、何を考えているの」

そつと近寄ってくる絶世の美貌に、俺は背筋が凍るのを感じていた。
(何で……怖いんだ)

一歩ずつ距離が縮まるに連れて、今来た道を引き返したくなる。

無意識に一步後ずさると、ますます向ここの機嫌が悪くなるのが分かった。

「嘘つきは、魔女の始まり…なんだよ」

第八話（前書き）

流血表現有り。

苦手な方はご注意ください。

第八話

その昔、深い森の奥に一人の魔女が住んでいた。

魔女は漆黒の闇に溶け込むような真つ黒な髪と、燃えるような真紅の瞳を持った女らしい。

しかし一度魔女に遭遇してしまつたら、その者は呪い殺されてしまふという噂だつた。

村の住人は魔女を恐れ、滅多に森を訪れようとはしなかった。村の食料のために森の入り口近くにある川の魚と、樹木に生る^な果物を取りに来るくらいであつた。

ある日、掟を破つて森の中を散策していた若者がいた。

若者はその村一番の働き者で、住民の誰からも慕われていた。

村長の娘と婚約をしていて、幸せな人生を歩むはずだつたのだが：

…。

雨が激しく降る深夜、若者は死体で見つかった。

抵抗したような痕跡はなく、首筋に噛みつかれたような二つの傷と、胸には銀のナイフが突き立てられていた。

若者を愛するあまり激昂した村の娘は、その身体からナイフを抜き取り、森の奥へと駆け出す。

住民は必死に止めたが混乱とその娘の気迫に負けて、娘を止めることが出来なかつた。

「私のレインを返して!!」

魔女の小屋へと辿り着いた娘は、血塗られた銀のナイフを魔女へ向かつて突きつけ叫んだ。

雨に濡れ、激しい風に晒され、愛する男を失つた女のその姿はあまりにも酷い姿であつた。

魔女はこの娘が若者の妻か、と乾いた声が心の中で零れ落ちる。

「レインか…その者がどうかしたのか」

「とぼけないで！！アンタが惑わして、殺したんでしょう！！！！」
「…っ！？」

魔女は驚きを隠すこともなく、娘に詰め寄った。

「どういうことじゃ。レインが…死んだとでも言うのか」

「ふざけないで！！！！アンタが殺したくせに…彼が何をしたっていうの！！！！」

（いったいどういうことなのじゃ…）

怒りと悲しみに飲み込まれた娘は、全ての感情をぶつけてきた。

血塗られた銀のナイフ。

か細い腕から振り下ろされたそれは、魔女の肩口へと突き刺さった。

「く…っ」

「呪ってやるわ…アンタなんか怖くないわよ。何故かしら？どうして今まで、私たちはアンタなんかに怯えていたのかしら。こんな…ただのオンナなんかに！！！！」

高らかに笑い狂う娘に、魔女は呆れて吐息が零れる。

何も分かっていない…。

娘が振り下ろした先は、自分の胸だというのに。

ナイフが刺さったまま笑い続ける娘が憐れであった。

しかし、自分も殺されるわけにはいかない理由のあった魔女は、小屋を後にする。

娘を避けて扉を開け、振り続ける雨の中へと消えていく。

己の惨状に気が付いた娘は、消え行く魔女に呪いの言葉を吐き続け

ていた。

「呪ってやるわ…アンタのその髪も、瞳も…全部ぜんぶ、半分になつてしまえばいいのよ！！私の一族が、絶対にアンタを許さないわ！！！」

その声が枯れるまで、その命が消えるまで、娘は叫び続けていた…

「ねえねえ、そのあとはどうなっちゃったんだ？」

「魔女は命からがら生き延びて、お腹にいた子供と過ごしたそうだよ」

「ええ！それって…死んじやったレインの子供？」

「さあ…それはどうなのだろうな…真実は、魔女にしか分からぬ」

凜の頭を軽く撫で、御伽噺おとぎばなしはそこで終わりを迎える。

けれど凜には納得出来なくて、どうしても結末が知りたかった。

男はどうして死んでしまったのだろう？

消えた魔女は、その後どうなってしまったんだろう？

どうして娘は魔女を殺すことが出来なかったのだろう？

に答えを求めるけれど、困ったように笑うだけで何も教えてはくれない。

宿めるように諭されるけれど、やっぱり腑に落ちないので顔がむくれる凜に、その人は内緒だよ、と言って教えてくれた。

「生まれたその子供は、娘に呪われて本当に半分の姿でこの世に生を受けたのだ。瞳は魔女の真紅の瞳と、男の碧い瞳。そして魔女の力の元となる漆黒の髪は、力を発揮する時だけ。それ以外の時は銀

の髪なのだ」

だからその髪と瞳を持つ一族は、一目で呪われた種族なのだと分かるようになっていた。

そしてその一族は見づかり次第、娘の一族の者にその命を狙われ続ける運命なのだ…

そう悲しげに話すこの人に、凜はわけも分からず悲しくなった。

「どうして、のろつたりなんかしたんだろう。そんなことしても、死んじやったひとはかえってこないのに」

「それはお前がまだ、大切なものを手に入れていないからだ」

「たいせつな…もの？」

「そう…。誰かを犠牲にしても、誰かの命を奪つてでも欲しいものがあるとき、人というのはどこまでも傲慢（ごうまん）になれるものなのだ」

「じゃあ、おれは　　のためにごーまんになるつ。だっておれ、がいちばんたいせつなんだもん！」

「……………。くくつ、そうか…お前は私のために傲慢になれるというのか」

「あ！またばかにしたあ…。おれはいつだってほんきなのに！！」

「はいはい、そうだな…」

ぜったい本気にしてくれていない…。

ぶうーっと膨れて見せるが、余計に子供っぽい気がしてすぐに止めた。

「おれはそのキレイなカミも目もだいすきだから」

「凜…………？」

凜はその人の流れるように輝く銀の髪にそっと触れて、確かめるように手のひらに乗せる。

サラサラと零れ落ちていくその感触を確かめながら、不思議な色をした瞳を見つめる。

「おれは、たとえのろわれてたって、ずっとすぎだよ……
シューラン」

第九話

ヤバイ……。

何かは分からないけれど、とにかくヤバイと本能が危険信号を発している。

目の前に立ちはだかる男は、ただ静かに俺を見下ろしていた。

逃げ出したくなる程重苦しい雰囲気^{セリフ}に飲み込まれそうになるけれど、背には壁が、顔の横には男の腕が置かれ、そこから抜け出す術^{すべ}を遮^{さへぎ}っていた。

（嘘……？ウソって何だよ！？）

俺は嘘をついた覚えなんかないし、ましてや魔女なんかじゃない（ってゆーか男だし）。

この男が一体何を考えているのかさっぱり分からない。

そも、この男の性格というか……この男自身^{セリフ}のことが、俺にはよく分からない。

へらへらと笑って軽かったり、急に真剣だったり、どこかもの悲し

げな表情だったり……。

どれが本当なのだろう？

どんな人なのだろうか…… - - この鷹司紅という男は。

「ねえ……黙ってると、襲^{セリフ}っちゃうよ？」

「ッ！」

「その怯えた顔……可愛いよねえ……。でもさ……キミがどんなに可愛い顔をしたとしても、やっぱり許せないんだよね」

どこか達観したように遠い目をするセンパイ。

からかうような言葉^{セリフ}はいつもと同じなのに、圧倒的な存在感が異質な空気を生み出していた。

（怖い……）

俺は初めてこの男を怖いと感じていることに驚きを隠せなかった。ふと、空いているもう片方の腕がこちらへと伸びてきて、俺はびくりと反射的に身体を竦^{すく}ませてしまった。

その反応がいけなかったのか、センプイは瞳は怒ったまま口元だけニヤリと笑みを浮かべた。

「ね、取り消して？」

「…っ」

冷たい手のひらがそろりと頬を伝う。

思わず視線を逸^そらすと、それを許さぬよう無理やり顔を向けさせられる。

恐る恐る見上げると、先ほどよりも近くなったセンプイの綺麗な顔が視界に飛び込んでくる。

少し長めの前髪から覗く鋭い視線に、胸を貫かれそうだった。

「センプイ……やだ…」

「…何が？僕はまだ…何もしていないよ？」

今からするけどね…と続けられた言葉を認識した時には既に、首筋に濡れた感触がしていた。

びくつと肩を震わせると、今度はその反応を楽しむように舐めまわされる。

その濡れた水音と得体の知れない感覚から逃れたくて抵抗しようと思うのに、何故か全く身体が動かない。

「な…んで…っ」

「動いちゃダメだよ。痛い目に遭^あつても知らないよ？」

「…いつ」

ちりつと左の肩口に痛みを感じて身体が震える。

何で怒っているんだろ…？

最初に怒っていたのは俺のはずなのに。

（あーもうやだ。意味分かんない）

半ば現実逃避に走ろうとするけれど、生々しい感触がそれを許してはくれない。

「ね…、取り消してくれるだけでいいんだよ？」

「やつ…なに、が…っ」

「酷い子だなあ…せっかくそれだけで許してあげるって言ってるのに」

「いた…っ」

クスクスと笑いながら俺の首筋や胸元に口付けを落として玩ぶセンパイ。
もてあそ

思うように動かない俺の身体とワケのわからない感情に、俺はまた泣きそうになっていた。

（取り消す…ってなんだよ！？いったい何を言えばいいんだよ…っ）
触れられた先からゾクゾクと湧き上がる未知の感覚に翻弄ほんろうされながら、まるで出口のない迷路に彷徨たぐひっているような気分だった。

右も左も逃げ道はなく、どれを選んでも正解が一つもない。

選択肢すらもあるのか無いのか分からなくて、困惑だけが俺を取り巻いていた。

ぐるぐると思考を巡らしても答えは出ない。

それでも現実から逃れたくてあれこれと考えていると、不意に顔を上げたセンパイと視線が絡み合った。

薄いグレーの瞳に光が差し込んで、一瞬だけ碧く見えた目。

そこに映る自分自身の顔はひどくうつろたえたように見えて情けなかった。

（何で俺なんだよ。俺がアンタに対して何をしたって言うんだよ…

っ。思い通りにいかない俺なんかじゃなくて、もつと綺麗で可愛くて、素直でお似合いのヤツが男女問わずこの学校には存在するのに…っ）
引っ込んでいたハズの水分がじんわりと浮き上がってきて、俺は零れ落ちないようにそつと瞬きをした。

「んう…っ」

僅かに目を閉じた瞬間、抵抗する間もなく唇を塞がれた。
驚いて反射的に身体が逃げようとするそと右肩を掴まれて壁に押し付けられた。

（痛…っ）

思わず眉をしかめるけれどセンパイは止めてくれない。

「んっ…ふ…あつ、やめ…っ」

角度を変えて次第に深くなっていく口付け。
冷たいセンパイの唇が、自分のそれから体温を奪ってドンドンと熱くなっていく。

幾度も繰り返されるキスの嵐に飲み込まれそうだった。

嫌なのに。

こんなのはやめて欲しいのに。

次第に生まれてくる苦しいだけじゃない感触。

それを認めたくなくて必死で心を否定する。

（違う…っ、こんな…しらない…っ）

それでも痺れるほどきつく吸われると、じわあつとそこに広がる何かがあった。

嫌なのに抵抗しきれない。

体格差から絶対的負けるのは分かっているけれど、そうじゃない。見えない何かが俺を縛って動けなくしているみたいな感覚だった。

「ん…可愛い、凜…くち、開けて？」
「いやだ…も、許し…は…あッ！」

息苦しさで込み上げてくる熱に頭がボーッとしてくる。

尚も俺を責め続けるセンパイの行為は、まるで俺に罰を与えているようだった。

重なる唇を離そうと顔を擦^{よじ}ればいつの間にか背中^{せなか}に回された腕が髪を引っ張って痛みを与えてくる。

引き摺られて顔が上向かされると、一瞬だけ呼吸を許されてまた塞がれた。

「いい子だから大人しくしてて？じゃないと…もっと酷いことしたくなる」

「…っん！」

宥めるようにちゅつと優しく啄ばむと、無理に開かされた口腔に柔らかいものが侵入してきた。

俺の舌とセンパイのそれとが絡まりあって弄ばれる。

上顎のあたりを撫でるように舐められ、捕らえられた舌をきつく吸われると頭の奥まで犯されてるみたいにジンと痺れるような感覚がした。

ふわふわと揺れてるみたい不思議な感じがする。

俺は与えられ続けるその感覚に身を委ね、されるがままにその甘い気持ち良さを受け入れてしまっていた。

「あ…っ、は……」

センパイにされるがまま繰り返される行為。

口の端からだらしなく零れ落ちる雫をぺろりと舐め取ると、センパイ

イはようやく解放してくれる。

「んあ……っ」

もう、終わり……？とねだるように思わずセンパイを見上げると、今までに無く優しい笑みを浮かべてくれた。

（どうしよう……俺、頭がおかしくなっちまったのかも）

キスだけで腰が砕けそうになるくらい感じてしまっているのはもう否定しようが無かった。

抱き寄せられた腕と押し付けられた背中の壁が無ければ、今にも崩れ落ちそうなくらいに足取りが危ういのが自分でも分かる。

「凜……」

耳たぶを甘噛みされながら少し低い声が鼓膜をくすぐってくる。
不覚にもその吐息にすら感じて、心臓が壊れそうなくらいバクバク鳴っていた。

（うるさいうるさいっ……静まれ心臓っ目を覚ませ俺！！）

ぎゅっと目をつぶって言い聞かせるけれど、身体はバカみたいにセンパイの言いなりだった。

「目……開けて？」

さらりと前髪を撫でられると、閉じていた^{まぶた}瞼にそっとキスが落とされる。

指先で真っ黒な髪に触れると、それだけでうっとりとしてしまいそんな自分に驚きを隠せなかった。

「……っ」

意を決してゆつくりと目を開けると、情事のせいか普段より一層色っぽく見えるセンパイがいた。

（く…っ、絶える俺っ、センパイ菌になんか負けるなッッ）

今の彼は、何かしろと言われたら素直に従ってしまいそうなほど艶あでやかなフェロモンが垂れ流し状態だった。

きつとこうやって、今までもハーレムを作ってきたのかと思うとなんだか無性に腹が立つてくる。

ヤツの思い通りになんかなりたくない。

その他大勢と同じだなんて真っ平ゴメンだった。

だからもう、解放して欲しい。

潤む瞳でゆるく睨むと、センパイは一瞬だけ目を見開いたような気がした。

「あんまり僕を挑発すると、後で後悔するよ？」

「…??？」

意味が分からん。

俺が『何言ってるんのアンタ』って顔を見ると、センパイは少し困ったような…それでいて楽しげな声で何か言ってくる。

「無自覚でそれやっているんだとしたら…凜は相当なタラシだね」

「んな…っ！」

タラシはアンタだろ！！と思わず叫びそうになるがぐっと思えて言葉飲み込む。

（何だっって俺がたらしなんだよっ。意味わかんねえ！…いや、この男の行動やら発言の意味が分かったことなんか一度だってないんだけどっ）

ファーストキスはすでに経験済みとは言え、あんな濃いのは初めてだ。

ああ…なんだってこんなコトに。

あるーことか俺は…感じちゃったりなんかしちゃってるし！

（いやいや、あんなのは気のせいだ！でなけりゃコイツが異常に上手いとか…そうだ、そうに決まっている！！あんなにいっぱいハレムがいるんだからこなしてる数だって半端ないハズだしっ！）

俺は心の中で必死に自分に言い訳をする。

そうじゃなくちゃあの人に申し訳が立たない。

俺にとって大切なのは……

あの人だけなのだ。

「ね、凜…英なんかよりも僕の方がずっとヨカッタでしょう？」

「………は？」

「イヤだな、照れなくても良いんだよ？」

「………いや、照れてませんけど」

「正直に言っていていいんだよ？英には内緒にしてあげるから。あいつはどーせ、甘い睦言^{むつご}を吐きながら軽くキスしたただけなんでしょう？」

「……………」

何言ってるんデスカ、コイツ。

殴ってもいいですか…？

うん、殴ってもいいと思う。っつか殴る権利は俺にはあるっ、ぜってーある！！

コイツはもしかして、くだらない勘違いで会長に張り合ってこんなコトしやがったのか！？

そうなのか！？っつかそうじゃなくちゃ納得出来ないし理解出来ない！

『取り消して』の意味もよく分からんけどきつとそんなどーしよーもない理由に違いない。

急に我に返った俺は腹のそこからムカムカと苛立ちを覚え、怖さも何もどこかへ行ってしまった。

そんなくっだらなことで唇を奪われた（しかも感じちゃった）俺はどーすりゃいいんだよ！？

ああ、今すぐにも穴掘って埋まりたい…。

俺は濡れた唇を袖でグイと拭くと、そのまま拘束の緩んだヤツの左腕を払い退ける。

「…！」

「俺は、アンタも会長もどーでも良いんだよっ！遊びなら他でやってくれ。俺はアンタらになんか構ってる余裕もヒマもねえんだよ！」

キツと睨みつけるとびっくりしたようなアホ面を浮かべたセンパイを尻目に、俺は走り出す。

（ああもー付き合ってらんねえ！！）

最初から付き合っているつもりもないけど、もう自分には関わらないで欲しい。

そんなことは、もっと時間もお金もあって、会長やセンパイを好きなやつらがやればいいことなのだ。

何も自分である必要なんかどこにも無かった。

なんだかヤケにムカついた俺は、後ろを振り返りもせずに教室へと戻っていく。

「ああーもうヤダーーっっ！！」

一際大きな独り言は、空しくも人気のない校舎裏へと響いていったのだった……

第十話（前書き）

短めです。

第十話

全てが暗闇に閉ざされていた彼を救ってくれたのは、小さな手だった。

深い闇と孤独に包まれ、常に生死の境を彷徨^{さまよ}っていた彼に差し出されたひとつの光。

淡^{もろ}くて脆^{もろ}く、あまりにも頼りないその輝きは、その儚さとは裏腹にとっても温かなものであった。

決して知ることの無かったその柔らかい光と温度^{かて}。

彼にとって、人など自らが生き延びるための糧^{かて}でしかなかったはずなのに。

皮肉にも、その手は光であると同時に己を切り裂く刃でもあった。

呪われた血を受け継ぐ彼は、人の生気を摂取しなければ生きられぬ身体であった。

本来、彼らの一族は不老不死に近い長命な種族であり、他者に頼らなくともその強い生命力だけで生存し、美麗な姿を保つことが出来る。

一族によつては多少は異なるが、基本的には同族同士で繁殖を繰り返し、その稀なる血族を守りながら繁栄してきた。

絶対個数^{デメント}があまり増えないのは長命であるがために子が出来にくいという弊害があるからだ。

それゆえ、異種間の交わりを強く禁じていた。

しかし長い歴史の中で掟を破ったものが過去に2度。いずれも同じ一族の者であった。

一度目は永久に一族の屋敷内で幽閉とされ人間の記憶を消すことで不問とした。二度目は両者とも消滅させることで、二度とこのような惨事が起きぬよう処置が行われていた。

しかし、半分だけとは言え絶対的な力を持った魔女の子は、種族の

中でも歴史が長く高位の一族でもあり、その絶大な能力と権力を惜しまれて生き延びることを許されていた。

通常の半分ほどしか生きることが許されていない彼は、暗い牢とも言える屋敷の中で一人……ただそこに存在しているだけであった。

常に監視者に見張られ、ろくな自由もない虚無の時間。

己を知るものなどほとんどなく、無意味に長い空虚な時間をただ流れのままに過ごし、いずれは消え行く存在であると彼自身何の疑いもなく当たり前のように受け止めていた。

それなのに。

「なぜなのだ……」

知ってしまった光。^{きほう}

知らぬのなら、知らないままにいたかったのに。

この世界に生を受けてから一度も動くことの無かった心を狂わすその存在を、幾度消してしまいたいと願ったことが。

そして運命のままに己の存在が消滅してしまえばいいと、どれほど想ったことが。

忘れたまままでいて欲しいと願いながら、心のどこかで己を求めて欲しいという矛盾。

^{あやし}妖である己がそのようなことを想うこと自体、間違っていると彼自身分かりきっていることなのに、それでも止めることなど出来ようはずもなかった。

「なぜ、思い出そうとするのだ……」

やめてくれ、と小さく零した言葉は、闇の中へとあっけなく消え去っていく。

強大な暗黒の前では、ほんの小さな灯^{あかり}など簡単に飲み込まれてしまふのに。

それでも捨て去り切れない深い想い。

己を求めるその声に、幾度慰められたことが彼自身知る由も無かった。

ただ、本能のままに人を食らう獣のままでいたかった。

そうすれば…己が醜いことにさえ、気づくこともなかったのに…

「約束は、決して果たされてはならぬのだ…」

刻々と迫り来る死神の足音。

もうすぐ時を終わらせる大鎌は振り下ろされる。

その瞬間が訪れるまでは、どうか

第十一話（前書き）

久々の更新の上、真冬なのに真夏の話……。

それってどうなのさ？と思いつつ、華麗にスルーしていただけると助かります。

第十一話

気がついたらもう夏休み。

夏だ！海だ！リゾートバイトだツツ！！

年に一度しかない貴重な長期休暇！

こりあもう、稼ぐしかないだろっ！！

今年は何がいいかな…。

煌く太陽の光をガンガン浴びながら海の家で接客？

それとも涼を求めてやってくる避暑地のホテルで給仕？

遊園地のプールで監視員とかなんかもやってみたいなあ…。

やっぱ交通費が掛かるのは嫌だし。

んー、やっぱ地元で探すかな。

常時入れている居酒屋のバイトも時給はいいんだけど、時間が短いからなあ。

朝か昼に出来るヤツで、時間に融通利くのがいいなあ。

出来ればまかない付きで、交通費は支給されるかチャリで行ける場所、時給がそこそこイイやつ！

「ねえねえ、凜ちゃん、次はコレやってねっ」

「……………」

つてぬわあんで俺は生徒会室こんなコナで文化祭こんなコナの準備をやってるんじゃないかあ
ああ…！

ようやく減ったと思っていたところに渡されてしまったのは、これ
また大量の資料の山。

しかも会計付き。

……俺、数学はあんま得意じゃないんですケド。
お金の計算は別だけだな…！

ちらと中身を見ると、予算案の計算とその項目内容のチェック……それが本当に妥当かどうかの確認を金銭感覚のトチ狂った金持ちブラザーズ（会長＆副会長）じゃなくて、ザ・庶民派である俺に回すなんて……

しりゅういん
四柳院のヤツ、おそろべし。

飯にも会計担当だったんだな。と妙に納得してしまった（書記と会計は兼任だそーな）。

いや、一応はセンパイである人呼び捨て&タメ口ってどうよ？と思わなくもないが、なんかもうそんな気が失せるくらいムカつくから気にしない。

いつまでたつても『ちゃん』付けしやがるし、止めるって言っても止める気配がまるでない（ってゆーか聞く気がない）ので、こっちもそれなりの態度になつてしまふのだ。

その上腹立つ程アホらしい項目が多すぎる！

「センパイ、何なんですかこの『交遊費』ってのは！ アンタが遊びただけなんだろっ、こんなバカなもんは認められません！ しかも何すかこの金額！！ ネズミランドでも半日貸切るつもりですか！！ そんなバカなこと考えてる暇があつたらとつとと学院長からハンコ貰つてきてください！！！」

「ええ、だつてみんなと仲良くしといたほうが、イロイロ便利ですよ？」

「んなもんは勝手に個人的にやってください！ 予算なんか出さなくても、アンタと遊びたがる暇人はそこらにいっぱいいるんですからっ。しかもセンパイ、金持ちなんだからわざわざ貴重な予算使わなくてもいいじゃないですか！」

「だあって、他人の金を使うのって楽しいじゃん？」

「……………」

「わっ、ゴメンそんな怒らないでよ。しょうがないなあ……じゃあ、公式的な名目があれば良いよね？ 何か全員が参加出来るようなイ

ベントとかさっ」

「…まあ、それならいいですけど」

「じゃーホテルでも貸し切って…「予算はこれの1/2000しか出せません。わかつたらサッサと院長室行つて来てください」……ハイ」

俺は思いっきり睨みつけて静かに指示すると、センパイは大人しく渡された書類を持って行つた。

まったく、本当に手が掛かる人だな。

センパイとはアレ以来、普通の先輩・後輩の関係を続けている。

こちらが戸惑っている暇など与えてなどくれないほど、至つて普通に接してきたからだ。

夏休みに入つて、結局補講の代わり生徒会の手伝いをさせられているから毎日顔を合わせなくちゃいけないし、俺だけ動揺してるのもなんだか悔しいからアノことは知らない振りをすることに決めた。生徒会の手伝いと言っても拘束時間は思っていたより多くないし、よつぽどの機密事項は知らされないから専ら雑用ばかりやっている。それに何より会長お手製のお昼ご飯付きつてのがかなり嬉しい！（これがまたちょー美味い）

急なバイトが入れば休ませてもらえるし、新しいことを覚えられるしで結構楽しんでやっている。

特に金の計算については…そんじょそこらの主婦よりウルサイんだぜ、俺。

悟られぬよう普通に作業しているように気をつけてはいるものの、四柳院にはしつかりバレていたみたいだ。

さつきから知らぬ顔で会計の仕事ばっか回してきやがる。

認められているようで嬉しいような、見透かされて悔しいような……でもやっぱり何かムカつく。

俺は予算案と勘定科目を見比べつつ、つい四柳院を睨んでしまう。当の四柳院はというと、俺の様子には全く気づかずにニコニコと笑

いながら過去の議事録と最近の議会の内容を確認していた。
くうっ、ノンキにヘラヘラしてんじゃねえーっ！

逆毛の立った猫みたいに苛立ちを隠さずにいると、ふいに頭の上を
ポンと撫でられた。

「！」

「凜…少し疲れたろう？お茶にでもしようか」

「英センパイ…」

さらりと宥める様に俺の頭を撫でるセンパイの手が優しい。

俺はうつとりとその手に委ねて、大人しくセンパイの声に従った。

何か、いつもそうなんだよなあ…英センパイって。

俺が腹が減ったりイライラしてたり不安になったりしていると、不思議と分かっちゃうみたいだ。

すぐに俺に声を掛けて来てくれて、やんわりと穏やかにさせてくれる。

自分が短気なのは分かっているけど、どうしても治せないんだよね…。

「英センパイ、ありがとうございます」

ちよつとでも感謝の気持ちが伝わるように笑ってみせると、英センパイは満足げに微笑みを返してくれた。

やった、またラッキーなもん見ちゃったな。

英センパイは仕事中は無表情が静かに怒っていることが多い。

まあ怒らせてる原因は…あの二人しかいないんだけどね。

他の委員会のヤツらが来ても常に冷静にしているし、ここにいるメンバー以外の人間がいたらまず表情が窺えない。

だから、俺にまで笑顔を見せてくれるっていうのは、それなりに気を許してもらえているような気がして単純に嬉しい。

英センパイとソファに並んで座って、ゆっくりとお茶を楽しんでいるとガチャリと扉が開いた。

「ああーズルイ。何二人だけいちゃいちゃしてんの！？ 僕がこーんなに頑張って働いてるってゆーのにつ」

学院長室から戻ってきたセンパイが開口一番に不満を口にする。

誰が働いてるって！？

しよっちゆう隙をみてはどこかへ遊びに消えていくクセに！

ム力つときた俺に気が付いたのか、英センパイは俺の頭を抱き寄せて冷ややかにヤツに視線を向ける。

「ほお…誰が頑張っているって…？ それじゃあもつとキリキリ働いてもらおうか。お前が持っているイベントの準備、全部任せたらな」

「なっ、ちよっ、そりやないだる英！」

「もちろんやるよなあ…？ じゃないと…」

英センパイは含みを持たせて悠然と笑みを浮かべると、そつと俺の頬に手のひらを滑らせる。

ふつと耳元に吐息を吹き返られて、くすぐたくて思わず肩を^{すく}締めると鷹司センパイがグツと噛み締めるように英センパイを睨^{にら}んでいた。

…？

しかし、すぐに諦めたようにため息を零す。

この二人にしか分からないやりとりが終了したらしい。

今回は（も？）鷹司センパイが負けたようだった。

「ちっ、仕方ないね。ねえ叶芽、僕の方も早くお茶出してっ！」

「ええ…なんで僕が………」

すぐやりマス。」

視線で脅されて渋々と室内の簡易キッチンへと向かう四柳院を尻目に、鷹司センパイは不機嫌さそのままにドカッとソファへと腰を下ろした。

「英センパイ、イベントって何のヤツですか…？」

「ん？ ああ、キミは去年は参加してないのか。文化祭の前に生徒たちのモチベーションアップと交友関係の強化を図ると称して生徒会主催のイベントを毎年やっているんだ。今年は肝試しだったか？」

「そおだよ。こうなったらとびっきりのお化けを用意してやるっ」

目が据わったまま不敵に笑う鷹司センパイに、英センパイは呆れたような苦笑を浮かべた。

第十二話（前書き）

大変お待たせしてしまい申し訳ございません。

（待っていてくださる方がいらっしやるのかも疑問ですが…）

しかも短い…。

終盤まで今しばらく掛かりますが終わらせる気はありますので、最後までお付き合いいただければ幸いです。

第十二話

ああ忙しい。

だから何だつて俺がこんな目に……っ！ と一瞬思うが、もういい加減そんなことを思うのもアホらしくなってきたくらい、時間に追われまくっていた。

通常の手伝いに加えてさらに鷹司センパイのイベントの準備を任された上に、それらをすべて本人に報告しろとか無茶を言われて仕事が増えてしまっていた。「報告なんてメモとかでいいじゃん、めんどくさい」という意見は却下された。

何でも、「直接顔を合わせて詳細に迅速に聞きたいから」だそーだ。

しかし毎回毎回、報告しようと鷹司センパイを探す時には何故か狙ったようにどこにもいない。

またどこかでサボっているのだとしたら、今度こそ怒鳴るだけでは気が治まらないだろう。

あまりにも効率が悪すぎて、俺はいつも以上に苛立っていた。

(っーか殺す！ 縛り付けて部屋に監禁して転がして置くっ！)

そんな物騒なことを本気で考えながら、バタバタと廊下を走り抜けていく。

「あんにやろ……どこ行きやがったっ。さっさとコレ渡してバイトに行かなきゃなんないっつのにっ！」

生徒会室にはもちろんいるはずも無く、職員室、保健室、食堂と出沒しそうな場所を当たってみるけれどやはりいない。

英センパイに教えてもらった、掛けたくはなけれど仕方なく渋々

と必要に駆られて嫌々ながらも（本当にスッゴイ嫌だったのだ）鷹司センパイの携帯を鳴らして見たが、反応はナシ。

（電源切ってまで何やってんだよアイツは……っっ！）

ストレス度がMAXに達しそうになりながら、今度は人気がなさそうな場所を探していく。

渡り廊下から体育館へと続く道を走っていくと、何処からか声が聞こえたような気がした。

「まさか…ね」

嫌な予感が頭をよぎるけれど、気のせいだと思うことにしてそつと近づいていく。

今日はどの部も活動をしていないので、体育館の周辺には誰もいない。

ドアには鍵が掛けられ、中には入れないようになっているはずだ。気のせい気のせい…

と自分こそそう言い聞かせて、誰もいないことを確認したらもう今日は諦めて英センパイに伝言してもらおうと勝手に決める。

「…あ、うん…っ…」

「…っ！」

小さいけれど、情事の最中のような声が聞こえて思わず硬直する。それ以上進むこともなく、微妙に漏れ聞こえる声を耳にしながら、どうしようかと迷ってしまった。

声と人の気配からして、この角を曲がったくらいの場所に誰がいる。

(…どうしよう。アイツじゃなかったら邪魔しちゃ悪いよな…。いや！　そもそも休み中とは言え校内でそーゆーことするのってどうなんだ…？　ああでもでもそうじゃないかも知れないし…)

オロオロとしながらそこでナニをしているのか想像してしまうけれど、このままここにいても状況は変わらない。
むしろ、ただの盗み聞きをする野暮なヤツになってしまう。

(自分が変態扱いされるのはさすがにイヤだ…)

うつうつと半泣き状態の心境だが、ヤツを捕まえなければ帰れない。

見つからないからと言ってバックレようものなら次の日が怖いことこの上なかった。

結局は我が身可愛さ故に確かめるしかない。

(ヘンなコトしてませんよーにつ！)

祈るような気持ちでそつと壁に身を寄せ、音を立てないように様子を窺^{うかが}った。

「　　ッッ！！」

思わず悲鳴を上げなかった自分を褒めてやりたい。

壁の向こう側で見たものはとても信じがたいものだった。

弛緩したようにだらしなく壁に寄りかかり、足を絡ませるようにして抱き合っている二人の生徒がいた。

一人は全く知らない男子で、可愛い顔に恍惚とした表情を浮かべている。思わず見てしまったこちらが恥ずかしくなるくらい色気を振りまいていて、その扇情的な雰囲気寒気が走った。

(気持ち…悪い…っ)

俺はたまらず吐き気を覚え、すぐさま顔を背けてしまった。

口を手で押さえ込み上げる悪寒に耐えていたけれど、一向に治まる気配がない。よろめきながら壁伝いに身体を移動させ、少しばかり離れた場所で座り込んでしまった。

「何なんだよ、あれ……っ」

ただの情事の最中などでは無かった。

いいや、その方がまだマシだったと思う。

見たくはないものではあったが、それでもまだ、アレよりは現実味を帯びている。

「あ…っ」

ズキリと酷く頭が痛い。次第にガンガンと耳鳴りがしてきて、ともに考えられなくなってくる。自分でも自分の状態が分からず、泣き喚きたいような、叫び出したいような衝動に駆られた。

「だ…、め」

その人は俺のもの。

「いやだよ……」

誰も、触らないで。

「どうして　　？」

睦言の最中にいたもう一人の生徒は。

「なんで、俺じゃないんだよ……」

桜華学院の制服を着た、シューランその人だった。

第十三話

目が覚めると、そこは見覚えのある景色だった。

ここはどこだろう、と辺りを見回すと、そこはかつて祖母と暮らしていた田舎にある山の中だった。

何故ここにいるのだろうかと思っていると、大きな樹の幹にうすくま蹲る幼い自分の姿を見つけた。

（ああ、これは夢なんだ…）

どこか遠くを見るように自分の姿を見つめながら、その時のことを思い出した。

両親がある日突然、いなくなってしまったあの日。

一人残されてしまった凜を、祖母以外は誰も引き取りたがらなかった。

幼いながらも周囲の感情に敏かった凜は、『老いた祖母に預けるなんてとんでもない』と言う大人たちの裏事情に気付いていた。

それでも頑として自分を育てると言う祖母の気持ちは嬉しくはあったが、自分のせいで大好きな祖母が欲に塗れた大人たちに酷いことを言われるのが嫌だった。

『どうして、おれだけがいるんだよ…？』

自分さえいなければと思い山の中へと逃げ出した。けれど小さな足では頂上まで登りきることが出来ず、程よい平面に大きくそび聳え立つ樹を見つけてそこに身を寄せていた。

『何をしている？』

ふいに頭上から落とされた声に驚き、小さな凜は反射的に顔を上げると、そこには背の高い銀色の髪をした大人が立っていた。

容姿は見たこともないほど美しく整っており、色の違う双眸がこちらを見つめている。

『ここは私の領地だ。お前は何故この場所におるのだ？』

冷たく問いかけてくる声は無機質で、けれど何処にも敵意を感じられない。

直感的に敵ではないと感じた凜は、真っ直ぐにその人を見つめ返した。

『おれのいばしょが、ないから...』

凜が答えると、その人は怪訝そうな顔をして続きを促してくる。

なんとなく、この綺麗な人は自分の話を聞いてくれそうな気がして、小さな胸に秘めていた思いを零してしまった。

『おとーさんとおかーさんがきえちゃったんだ。ばーちゃんがおれとくらそうって、言ってくれたけど、まわりのおとながメーワクになるからダメだって...。シセツってところか、おかねがあればオバさんちでもイイって言ってた...』

自分で言っていて思わず涙ぐむ。けれど、最後まで言わなくちゃいけないような気がしていた。

『おれもそうしたばーがイイって、おもったんだ。だけど...』
『だけど、なんだ？』

『ひとりは、さみしいからイヤなんだ...』

「だからココにきたんだ」と言っ、胸元のシャツをぎゅうつと握り締めた。

怒られると思ってこれからどうしようか悩んだ。

不慣れな村で行ける場所はこの山だけ。山を降りれば大人たちに見つかってしまうし、かと言って村に降りずにこの山以外の場所へ行くことは難しかった。

『ココは、さみしくないのか？』

ふいに問いかけられた意味がすぐには理解出来なかった。この場所にいたのは偶然だった。ただ、以前両親と登ったことのある山にもう一度来たかっただけなのだから。

途中で道を間違えていたかもしれないと不安になっていた時に、この樹を見つけた。

『…なんかね、このき、あつたかいんだ』

『暖かい？』

『うん…。おれ、まえにきたときはなかったとおもっただけど、このきをみつけたとき、ちよつとうれしかったんだ。このきがね、おれもさみしいって、言ったようなきがしたから』

『…お前は本当に不思議なヤツだな』

その人はくつくつと笑って、小さな凜の頭をぐしゃぐしゃと撫でた。

『いたっ、なにすんだよう』

ぶーっと文句を言っ、尚もその人は楽しそうに微笑み、今度はもう少し優しく髪を撫でてくれる。

『くくくつ、気が変わったわ。お前だけは特別に、私の領地へ足を踏み入れることを許可してやるわ』

『…？ りょーち？ きよか？』

難しい言葉が並び、まだ幼い凜には理解出来なかった。けれど、怒っている様子はないので、きっとここにも良いのだろうと思った。

『ねえ、おにーさん？ おねーさん？ どっちかわかんないけど、おなまえは？ おれはりん。おうみ りん。おとこだよ』

『……リン。良い響きの名だな。私の名は シュトツツエルドラン・アーク・フェルーナだ。私には正確な性別などはないだが、強いて言うのなら、男になるな』

『しゅと……らん…… なんとか？ おにーさんの？』

『シュトツツエルドランだ。まあ良い。お前には特別に私の名をその身に宿すことを許そう』

『ううーん？ ながくてむつかしいなまえだなあ。シューランってよんでもいい？ おれといっしょで、どっちにもきこえるから』

『くくつ、そうだな。お前と一緒に。シューラン…中々良い愛称だ。私に愛称を付けるものなどお前くらいなものだ』

シューランは嬉しそうに不思議な色の瞳を細めると、小さな手を取って自分の大きなそれと重ね、凜の胸元へと導いた。

『我、シュトツツエルドラン・アーク・フェルーナの名において命ず。この者に我の真名を宿し、いつ如何なる時にもその名において我を召喚することを許す』

シューランが何事かを囁くと、急に触れられた箇所が暖かくなっ

て輝いた。

『うわっ、なんだよこれ！？』

驚いて光を感じたところを見つめると、心臓の辺りに小さな痣のようなものが出来ている。一瞬だけチクリとして痛みを感じたけれど、次に見た瞬間にはその痣はどこにも無くなっていた。

『うわーすげーっ。シューラン、なにしたの？』

『魂の誓約だ。これで私はいつでもお前が何処にいるのか分かるし、お前が何をしているのかも大体分かるようになった。その代わり、お前はいつでも私の名を呼べば、お前の傍に呼ぶことが出来る』

『うん！？ おれにはシューランのこと、わかんないの？』

『お前がもう少し大人になれば出来なくもないが……まあ、ようするに、私の名を呼べばすぐにお前の元へ来るということだ』

『ホントウっ！？ じゃあ……じゃあ、おれ、たくさんシューランにあいたいっ』

『かまわぬ。けれど、この誓約は私の真名でないとならぬのだぞ？』

『しんみよーって……さっきのながい、アレ？』

『そうだ』

『ええ……、おれにはちよつと、むり。じゃあっ、またココにきてもいいっ！？』

『くくっ、お前が大人になるまでは無理か。ならば、いつでも来ると良い。私はしばらく、ココに滞在しているからな』

『やったっ。シューラン、ありがとう！』

満面の笑みで抱きついて礼を言うと、シューランは驚いたように双眸を見開いた。なんで？ と思っていると、やがて戸惑いながらも優しく抱きしめ返してくれるのを感じた。

凜はもつと嬉しくなって、最上の笑みをシューランに向けていた。

「シューラン…」

この時確かに、自分は幸せだった。

寂しくて、祖母を苦しめたくなくて、でもどうしようも無かった
幼い自分を救ってくれた手。

結局祖母は周囲の反対を押し切って、自分を育ててくれたけれど、
無理が祟って数ヶ月後には亡くなってしまった。

その後、時を同じくしてシューランとも会えなくなって、東京の
伯母の下へと預けられた。

中学までの生活費のほとんどは両親と祖母の残してくれたもので
補ったけれど、伯母の家に養育費として奪われてしまったものの方
が多かった。

学費だけはどうしても桜華学院に行きたくて贅沢してしまったけ
れど、それ以外は全てバイト代で補うようになった。けれどそれは
お金が足りないだけでなく、単に寂しいからあの家にいたくないだ
けだった。

伯母の家では自分は いないも同然の存在なのだから。

「俺にはもう、シューランしかないんだよ……」

それなのに、あの人にとって自分は…必要のない存在なのかもし
れない。

「シュトツツエルドラン・アーク・フェルナー…」

今その名を口にしても約束通り現れてはくれない絶望に、涙を抑
えることなど出来るはずが無かった。

第十三話（後書き）

お待たせ致しました。ようやく全体が何となく書けてきたような気がします。クオリティーが低くてすみません。。。誤字脱字・ご意見・評価、どうぞよろしくお願い致します。また、活動報告にも記載しましたが、前作「chronos」の移行が完了次第、こちらの作品もムーンライトノベルの方へ移行する予定です。読者の年齢層が分らないので…。もし、18歳未満の読者様がいらつしやるようでしたら、性描写無しで進めたものをこちらに投稿したいと思います。早く更新しないと…っ、といつも思ってはいるので（実行出来てなくてすみません。。。orz）、今後ともどうぞよろしくお願い申し上げますm（――）m

第十四話

「何やってるの」

不意に頭上から落とされた言葉に、すぐに気がつかなかった。

「……なんで、泣いてるの」

泣いてなんかいない。

ただ、心が空っぽになったみたいに、今は何にも考えられないだけだった。

「どうしてキミは、僕を見てくれないんだろうね」

大きなため息と共に零された言葉は、どこか悲しげに聞こえた。
何を言ってるんだろう？

俺は、ちゃんと見てるじゃないか。

……アンタのことを。

「そういう意味じゃない。そんな瞳は、ただ姿を映してるだけだよ」

俺はただ、会いたかっただけなんだ。

あの人に。

夢じゃなくて、幻でもなくて。

そう……恋でも懂れでもなくて、ただの執着心だけなんだよ。

「だから？」

だから……アンタに会いたくなかった。
知りたくないんだ。

お願いだから……
優しくしないで。

「ふふっ…、バカだね、凜は」

言葉とともに、柔らかな体温が身体を包み込んだ。
温かくて心地が良いのに、酷く逃げ出したい気持ちに駆られる。

「や、だ」

小さく抵抗を示すと、尚更強く温もりに囚われる。

「ちゃんと、僕を見て」

ぎゅっと抱きしめられる力強さに、どこか安心感を覚えるのは何故だろう。

不思議に思ってそっと視線を上げると、泣き笑いみたいな顔をした男の表情があった。

「そんな顔してもダメだよ。僕にはただ
優しくしてほしい
ってしか聞こえない」

何言ってんの…？
俺は、ただ

「ったく、可愛い顔して、意外と意地っ張りなんだから。そーゆー
ところ、昔から全然変わってないね」

は…？

アンタとは去年からの付き合いだけど。
ぼんやりとした頭でそう心の中ではやくと、何故か答えはすぐに返ってくる。

「好きだよ、凜」

唐突に贈られる言葉は、まるで蜜のよう。

「ずっと、キミだけを」

どこか耳に馴染む美声が、俺の思考を鈍らせていく。
甘く、緩やかに、けれど確実に大切なものを奪っていく感覚がした。

「だから、」

「いや、だっ！」

頭の中を警戒するように鐘が鳴り響く。
その先を聞いてはいけないような気がして。
聞いてしまったら、それが最後のような予感がして。
けれど。

必死の静止も虚しく、俺の胸を貫いていく。

「だから、アイツの存在は今すぐ忘れなさい」

発せられた言葉と共に、どこかでガラスの割れる音がした。

第十四話（後書き）

感想やお気に入り登録をいただきまして、本当にありがとうございます。

現在、復帰に向けて準備中でございます。

すごい微妙なところで止まってて申し訳ないです。

気がとつても長い読者様に、最大の感謝を申し上げます。

重ねて御礼申し上げます。

第十五話

鷹司センパイは、一体何を考えているんだろうか。
ここ数日の俺の頭の中はそれだけが占めていた。

（あの人は、シューランの存在を知っている？）

ありえない。

だけど、あの物言いはどう考えても知っているような言い方だった。

どうして？

「……だめだ、いくら考えてもわかんねえや」

ふう、とため息を零すけれど、気が付くとまた同じことを考えている自分がいた。

鷹司センパイは、俺にどうして欲しいのだろうか。

あの人を見ろって？

ちらりと彼が座っているデスクの方を見やると、珍しく真面目に書類を片付けているようだった。

隣には、冷やかな表情をしたままの英センパイが何事かを言っている。

（また怒られてんのかな）

まあ、俺には関係ないんだけど……と一人ごちでいると、突然目の前にドンッ！！と大量の書類が置かれた。

「……っ!？」

驚いて紙の山が降りてきた場所を見上げると、天使のような顔を
した悪魔がにこやかに微笑んでいた。

(やべえ、まずい……)

焦って逃げようとしたが、時は既に遅し。

「凜ちやああん？ 随分と暇そうだね？ 一応、くそ忙しい時期
だと思ってるんだけどね、僕は？」

「ああ……、俺も、そう……だと思ってますよ、一応、ハイ」

知らず敬語になってしまっているのはご愛嬌だ。

思わず逃げ腰になる俺だが、当然そのまま逃がしてくれるような
四柳院ではない。

「これ、よろしくねっ」

語尾にハートマークでも付いていそうな物言いだ、目は全っ然、
これっぽっちも笑ってなどいなかった。

「はい……」

これ以上仕事を増やされては堪るまいと大人しく頷いておく。

(どうしても終わらなかったら、あとで英センパイに手伝ってもら
おう……)

ぼそりと心の中で零すと、自席に戻ろうとしていた四柳院が思い

切り振り返った。

びくつと反射的に肩を震わせてしまっ自分を情けなく思うが、これ以上は本気で今日中に終わるような量じゃない。

何か言うのかと身構えていると、そんな俺の様子に満足したのか、特に何も言わずにそのまま戻って行った。

「……頑張ろ」

とりあえず今は悩んでいる時間がもったいない。

目の前の殺人的量を片付けるべく、しゅしゅと書類に手を伸ばした。

「終わっ……たあゝっ」

ぐてつと机に突っ伏すと、知らずに溜まっていた疲労が一気に身体に押し掛かってきた。

「もうムリ、何も見たくねえ……活字なんて嫌いだ……」

勉強なんて得意ではない上に、読書なんてほとんどしない。

そんな俺が毎日毎日書類と闘っていたのだ。

想像以上に疲れたのは言うまでもない。

「もう何もしませーん」と宣言するようにだらーんと重力に身を任せていると、上から優しく髪を撫でられる感触がした。

「お疲れ、凜。良く頑張ったな」

顔を上げる体力もろくに残っておらず、だらしない体勢のまま視線だけ見上げると、少しだけ疲労の色が見える英センパイが労いの言葉をくれた。

「ありがとうございます。英センパイも、お疲れ様でした」

今日でやっと、全ての準備が終わったのだ。

人一倍、いや、十倍以上働いている英センパイのほうがよっぽど大変だったというのに、下っ端小間使いでしかもあまり役に立っていない（つてか補習がわりにお邪魔させてもらっている身分の）俺にまで気遣いをしてくれるなんて、本当に良い人だ。

金持ちセレブ嫌い（アレルギーと言ってもいい！）な俺だったが、ここ数週間で彼らと接しているうちに、先入観はいけなないと反省した。

まあ、相変わらず大つつ嫌いな部類の人間もいるにはいるのだが、けれど、この生徒会室の中にそんな愚者がいるはずも無いので、俺は快適な気分のまま仕事をする事が出来た。

肉体的には疲労困憊ひろつうこんぱいだけれど。

「叶芽、お茶」

「ボクはお茶じゃありませんー……………ちょっと待つ！　いったあゝ、ボクだって疲れてるのにいいい」

文句を言おうとした四柳院は、それすら許されないうちに傍らのペットボトルを投げつけられている。

いつも思っけれど、鷹司センパイの四柳院に対する扱いは非道だ。だけどなんだか微笑ましい（つか、とばっちりを受けたくない）

から放っているけど。

英センパイに頭を撫でられながらそんなことを考えていると、普段より幾分機嫌の悪そうな表情で残りの仕事を片付けている鷹司センパイの顔が目に入った。

「四柳院、俺がやるから良いよ」

そう言っ、て、疲れた身体を無理やり叩き起こす。

英センパイがちよつと意外そうな顔をした後で、何やら意味深な笑みを浮かべていたけれど、ここは知らんぷりを決め込む。

（俺が一番下っ端だし、皆疲れてるし、もう自分のは終わったし、お茶ぐらい……っ、って何言い訳してんだよ、俺は）

げんなりと自分の心に理由付けをする己の思考が憎たらしい。
もう少し、素直になればいいのに。

（ムリだけど。）

間髪入れずに突っ込みを入れる自分の言い訳癖は治りそうもないので諦めるとして、誰かに何か言われる前にそそくさと簡易キッチンへと向かう。

いつも英センパイが煎れてくれるのを見ていたので、何処に何があるのかは分かっていた。

……美味しく煎れられるかは別として。

「うーん、こんなもんかな」

濃い目に抽出した紅茶に氷を入れて、少し冷ましておく。
そこへさらに、以前冷凍庫に入れて作っておいた蜂蜜色の氷をグ

ラスに投下し、準備オツケー。

最後に微量のトマトジュースを加えて完成だ。

「これの何処が美味しいのか全つつつ然、理解出来ないけどな……」

酸味と微かな甘みが紅茶の香りと混ざり合って、上品な旨みが生まれるらしい…。

そんな高尚な趣味は俺にはないので、同じく冷やした紅茶に氷を追加してアイステイー、四柳院にはオレンジジュースをブレンドしてオレンジティー、そして英センパイはそのままのストレートティーを作った。

余った分はパットに流し込んで冷凍庫で冷やしておく。

こうすれば、後でお代わりを要求されても味が薄まらない氷を作れるからだ。

「はい、お待たせしました」

トレイにグラスを持っていくと、英センパイがソファの傍のテーブルに置くように言う。

俺は言われるままにいつもの配置にグラスを置いた。

長方形の大きめのテーブルに英センパイ、鷹司センパイ、四柳院、俺の順にぐるっと時計周りになっている。

ちなみに俺はいつも英センパイの隣なので、必然的に鷹司センパイとは対角線の位置になることになる。

「ありがと、凜。けど、どーして僕の方だけじゃなのかな？」

全員分を持ってきた俺に不服そうな顔をする鷹司センパイ。
いや、単に手間じゃなかったから作っただけなんだけど……。

「ま、まあ、いいじゃないですか。とりあえずこっちで休憩したらどうですか」

めんどくせえ〜と思いつつ、ストレス度MAXになりつつある彼に喧嘩を売るのは得策ではないので止めておく。

（これ以上疲れることはしたくないんだっつの…）

はあ、とため息を吐きつつ、定位置に座って汗をかき始めたグラスに口をつけた。

英センパイ、四柳院も順に席に着くけれど、飲み物を所望した本人が未だデスクに囁り付いたままだ。

「鷹司センパイ、お茶……ぬるくなっちゃいますけど」

「………凜」

「はい？」

「持ってきて」

「何で俺が……ってはいはい、持ってけばいいんでしょ、そっちなで」

はあ〜、とまたもやため息を吐きつつ、濡れたグラスの底をさつと拭いて持つて行く。

山積みになった書類まで濡れたら大惨事になること必須だ。

俺だったらそんな危険な場所に水分を持ち込んだりなんか出来ない（一回零して全部やり直しになったことがあるからだけ。）

「はい、凜くん宅急便の配達ですよ。配達料はアイス一個ね」

「ふうん？ アイス一個でキミが僕に会いに来てくれるなら、毎日でも頼もつかな」

「はっ！？ 何寝ぼけてんだよっ！？ 配達範囲はこの生徒会室内

のみなんでムリ！」

「なあーんだ、残念。あつ、そうだ、凜」

ん?

さっさと離れようとしていた俺は、不自然に名前を呼ばれたことに何の疑問も持たずに振り向いてしまった。

「つっつっ！？」

「捺印代わり、だよ」

そうほざいたヤツが軽く触れた先は、俺の唇、だった。

「いっしょ」

「あれ、意外と怒ってない？　じゃあもう一回……」

[illegible]

頬が羞恥に赤くなつていくのを隠すため、俺は全力でヤツにビンタを食らわしてやった。

（真面目に頑張ってるなんて褒めるんじゃないかったっ！）

もう絶対に甘い顔はしてやるまいと心に誓うけれど、最近どうにも判断が甘い自分にはムリだろうな、とどこかで思う俺だった。

第十六話

このーきなんの気 気になる気……

間違えてません、わざとです…。

気になっちゃうんだよ、とにかくっ！！

何故かは分からないけど、シューランのこととかこれからのこととか考えてると、絶対に頭に過ぎよっちゃうんだよどうしてかつ！
今どうしてるんだろとかとか、この間のこと気にしてるんじゃないかとか、また怒らせちまったなあとかイロイロと！！

え？ 誰のことかって？ そりゃ……アイツの、こと……だよ。

「ってちよつと待てよ俺っ!？」

ほんの一瞬前まで考えていた自分の思考が恐ろしい。

ナニ乙女みたいなこと考えてんだよ俺!？

いやいやいやいや、そうじゃなくって、問題は気になってるとか思っちゃっていることだよ。

でも、本当に……俺はどうしたいんだろう。

あと少し。

ほんのちよつと、何かを見つけることが出来れば、きちんとシューランに会えると思うんだ。

この間見てしまったシューランの姿。

認めたくない行為だったけれど、あれは間違いなく彼だった。
長い間ずっと求めて止まなかった。

記憶の中で美化してしまうことってあると思うんだけど、そんな

ものを一掃してしまうくらい綺麗で美しいままのシューラン。

その姿は驚くほど何も変わってなどい^いなかつた。

透き通った銀の髪も、左右で色の違う二つの瞳も。

何年も前に見た、造りものののように整いすぎた顔立ちさえも、時が止まったようにあの日のままで。

けれどその表情だけは、見たことがないほど怖かつた。

「シューランは、俺にどうして欲しいの……？」

こんなにも近くにいるのに、あちこちにその存在を思わせる痕跡^{こんせき}があるのに。

自分の目の前に、現れてはくれない彼^かの人。

「俺が、シューランだけを、見ていないから……？」

どちらも気になってしまふ、優柔不断な自分に嫌気が差してくる。アイツのこともちゃんと見なくちゃって思っているのも本当だ。だけど、自分にとって一番大切なのは？

「俺の……バカ」

どっちも欲しいなんて、何時の間にそんなに我俣になつてしまつたんだろうか。

「寂しいのが、嫌なだけのくせに……」

傍にいてくれるのなら、誰でもいいのかもしれないなんて、どれほど自分は傲慢な人間なんだろう。

「目に見えているものだけが全てじゃない」って、知っているくせ

に。

それなのに、こんなにも惑わされてしまう。
現実はいつだって待ってはくれなくて。

知らない間に自分は、何かを間違えてしまったのかもしれない。
た。

「凜！」

肝試しイベント当日。

集合場所では出席簿を取っていると、後ろから声を掛けられた。

「はい？ …… ってなんだ、雅人じゃん」

辺りも薄っすらと暗くなり始め、周辺にはバラバラと人が集まり
始めている。

振り返ると、悪友である九条雅人がこちらへとやって来た。

「なんだ、って…… 相変わらず冷たいな、俺の親友様は。最近俺に
会えなくて拗ねてんのか？」

「ばっ！ ナニ言ってるんだよお前はっ！ そんな訳あるかっっ！！」

冗談はマジで止めてくれ。

後ろから殺気立った視線がビシバシ感じるなんて思っるのは、俺の
気のせいであって欲しいと切実に願うよ……。

「え〜…ツレないヤツだな、全く。俺がこんなにも愛してるって言うのに」

「……………」

コイツ、本気で、殺るしかない！

「ふーん……なんだか楽しそうだね、凜？」

「つつ！」

完全犯罪を頭の中で計画していたけれど、そんなものはあつという間に吹っ飛ぶくらいある意味怖い声を掛けられた。

（マズイ……いろんな意味でマズイぞこれは……）

雅人と副会長は仲が悪い。

いや、悪いという言葉は語弊ごへいかもしれない。

けれど、親しくもなければ良好な関係ではないことだけは確かだ。その証拠に、さっきまでふざけていた雅人の空気が一変いっぺんして険々な雰囲気になっている。

「はいはいはい、雅人も性質たちの悪い冗談ばっか言ってるんで、あつちの四柳院の方で受付してこいよ。俺はまだ仕事あるから、なっ」

俺はそう言っつて、グイと雅人の背を押して、四柳院の方へと追いやる。

渋々といった感じで誤魔化されてくれた雅人がいなくなると、今度は別の意味で危険な雰囲気を感じるのを感じた。

ある意味でドキドキと緊張してくるのが自分でも分かる。

（どうしよう、最近の俺はこんなのはっかりだ）

何でこんなにも意識してしまうのだろう。
ただ、気になる……それだけなのに。

「……凜？」

「……………」

ゆっくりと鷹司先輩の方を向くと、さっきの不機嫌さは何処へやら、優しく自分を見つめてくる瞳とぶつかった。

薄いグレーの瞳。

柔らかそうな、サラサラと揺れる薄茶の髪。

王子様の異名を持つ、バランスの取れた綺麗な顔立ち。

いつもアホなことばっか言うくせに、本当は誰よりも先を考えている不思議な人。

（……そうだ。本当は、バカなんかじゃ全然なくて、生徒会長と同じくらい賢い人、なんだよな）

この夏休み中に幾度と無く見てきた。

くだらないって思ったり、効率が悪いって思うことも多かったけれど、結果としていつだってそれが最善だったんだって何度も思った。

一緒に仕事をしなければ知りえなかった一面。

今日の段取りだって、自分はただ言われた通りのことを成すだけ。スケジュールや必要なものなど、決めなければならぬ細かいことも全てこの人が自分でやったんだ。

自分はただ、指示されたことをこなしていくだけで、何も考えなくて良かったんだ。

（俺……見ているようで、何も見てなかったんだよな）

有能さを表すかのように、続々と人が集まってきた。
休み中なんて、連絡が滞ったりすることなんてザラにあるのに。
この人に掛ければ、そんな初歩的な問題なんて絶対に起こらない。

（忘れてたけど、生徒会長の次に人気あるんだよな、この人……）

何でそんな人が俺なんかに構ってくるんだろう？ とまで考え始めていると、目の前にずいとその秀麗な顔を寄せられた。

「っ！ な、なんですかつつ！」

「そんなに熱っぽい瞳で見つめられてたら、勘違いもするよ？」
「はあっ！？ 何言って……っ」

文句を言おうとしたけれど、軽くちゅつと唇に触れられる。
こんなところで一体ナニを考えてるんだよコイツはっ！？

（って違っだろ俺っ！ 怒るトコはソコじゃないだろーっ！っつ！）

半ば慣れてきてしまったこの行為に、何の疑問も持たない自分が恐ろしい。

もっとキモチワルイだとか、こんなことは止めて欲しいとか、言うべきことはたくさんあるはずなのに。
振り回されてばかりで、冷静な判断なんて出来るはずが無かった。

「もう……始まります。早く行きましょう」

今の俺に言えるのは、それだけだった。

第十七話

「……マジですか。」

「うん、マジだねー」

「コレってなんか故意に仕掛けられてたりするんじゃないの……?」

「うん、そうだねー」

「あはは……やっぱり……ってアンタなっ!!」

参加者が全員集まり、残ったくじを引くと何故か鷹司先輩と同じ番号が。

この肝試しは二人一組でペアを組み、枷^{かせ}で互いの手首を繋いで、決められたルートを通って最後に外すというもの。

終点にその枷（まあ普通に手錠だよな）を外す鍵があるらしい。ただし、通るルートは番号によって若干違いうらしく、もちろん鍵のある場所も違うので、ズルが出来ない仕組みになっているのだ。普通は男女でペアになるはず、なんだけど……

「何で俺がアンタと一緒に回んなくちゃなんないんですかつつ!!」
「ホラ、だって僕たち仲良しだし?」

どこがだよっ!! と突っ込んでやりたいけどグツと我慢する。
ヘンに抵抗し過ぎて身に危険が及ぶのを回避するためだ。
そうこうしているうちに、手際良くカシャンと音を立てて互いの手首が繋がれる。

（ヤバイ……思ったより距離近すぎじゃねえか……っつ）

少しでもバランスを崩したら最後、ヤツの思いがままになりそう

なほどの至近距離だった。

「はい、出来た。じゃあ行こうか」

「わかつ……わかつたから先に行くなっ」

グイと引つ張られて危うく転びそうになるけれど、何とか踏ん張って鷹司先輩の後に続いていく。

「さて、僕たちのルートにはナニが出るのかな？」

「ナニもどうも、アンタが自分で決めたんじゃないですか」

「ふふふっ、気になる？」

「……いいえ。もう何かイロイロ諦めました。どうせまだ何か企んでるんでしょ」

「企むなんて人聞きが悪いなあ。僕たちのコースにはとびっきりのを用意してあるから。さ、早く行こう」

「ちよっ、だから引つ張るなあああああ!!」

人の気も知らないでズンズン進んでいく鷹司先輩。

俺は引きずられながらも、何とかその背について行くしかなかった。

辺りはもうすっかりと日も落ち、薄闇に包まれている。

それなりに少なくない人数が、この広大な校内のどこかにいると言いつのにも関わらず、俺と鷹司先輩の二人以外、誰かいるという気配が全くなかった。

不気味すぎるくらい静かな道のりの中で、鷹司先輩は一言も発してこない。

その態度すらも何か意味があるんじゃないかと疑ってしまうのは、

仕方が無いような気がした。

「センパイ……？」

訝^{いぶか}しみながら、不意に立ち止まった鷹司先輩に声を掛ける。

一向に振り向かない先輩が向ける視線の先へと自分も向かうと、そこには満開に咲き誇ったあの桜の木があった。

「凄い……綺麗……」

真夏にも関わらず美しく華を開いているその光景は、表現しがたいほどに綺麗だった。

夜空に舞う星の煌きに照らされて、キラキラと輝いているようにも見える薄紅色の花びら。

前はよく昼間に来ていたけれど、夏休みに入ってから一度も来ていなかったから知らなかった。

何時の間に、こんなに季節外れの華を咲かせていたのだろうか。

「この樹はね、特別なんだよ」

不意に、吐息を零すように鷹司先輩が口を開く。

さっきまで、何を言っても黙っていたのに。

一体何なのだろう。

不思議に思っただけその顔を見上げると、その薄い色彩が、闇と混ざり合っただけ濃い藍色のような瞳に見えた。

角度を変えると、青とも言えないような不思議な色。

その吸い込まれそうな神秘的な色に見とれていると、困ったように鷹司先輩が笑った。

「ねえ、凜……」

「はい……」

「キミはどうして、僕の前に現れたりしたのかな」

「……？」

言っていることの意味が分からない。

どこか達観したような先輩の視線の先には、変わらずあり続ける大木の桜があった。

「キミが現れたりしなければ、僕は僕のままではいられたのにね」

「あの、それってどういう意味ですか」

さつきから、話している言葉に一貫性が無さ過ぎて分からない。それでも先輩の中では統一されているのか、それには答えずに言葉を繋げていった。

「この樹はね、とある存在と共鳴しているんだ。そいつが人の生気を得ると、この華が満開に咲く。まるで、得た血を吸っているかのような色をしてね」

侮蔑するように軽く吐くと、そつと俺と繋がれた手を伸ばしてその樹に触れた。

「……っ!？」

すると、先ほどまで薄紅色だったその花びらたちが、あつという間に濃い紅色になっていく。

その光景に驚いていると、鷹司先輩はその手を放して俺の頬に触れた。

「僕が、怖い？」

この血の色をした花と同じように。
言外に言われたような気がした。

けれどその言葉に返すものを、俺は持ち合わせてなどいなかった。

「怖い、かどつかは分からない。でも……」
「でも？」

何て言ったらいいのかわからない。

何て言って欲しいのかもわからない。

だけど、今のこの人は、なんだか……

「なんだか、今のアンタは……寂しそうだ」
「！」

弾かれたような顔をした鷹司先輩を、初めてみたような気がした。
だけどその表情は、昔見たような気もした。

全然顔立ちは似てなんかいないのに。

何でだろう。

だけど確かに今のこの人は、どこか懐かしいほど不安定な雰囲気
をしている。

あの人を求めて止まない、寂しがりの自分と同じように。

「アンタがどう思おうと、俺はこの樹が好きだよ。季節外れだろう
と、変わった色をしていようと」

「……どうして？」

「だって、ここにいと暖かいから」
あった

「……………」

「この樹も俺も、一緒なんだ。寂しくて、でも誰かに傍にいて欲し
くて。だから、」

「だから？」

「俺がアンタの前に現れたのは偶然でも、この樹が傍にある限り、アンタとこの樹が繋がっている限り、きっと何度でもアンタと会うような気がするよ」

何故なら自分は、この樹に惹かれてこの学院にやってきたのだから。

「だから、」

こんなにも気になってしまうのかも知れない。
この人がどうして俺に構うのかは分からないけれど。

「知りたい……とは思うよ、アンタのこと」

知らないから気になってしまう。

見えないからもつと見たくなってしまう。

そうだ、きっとそんな簡単なことだったんだと今更ながらに思った。

考えすぎて見えなくなっていたことだけど、本当はもっと単純なことなんだ。

知りたい。

今はただ、それだけ。

「っ！」

不意に強く抱き寄せられ、きつく腕を回される。

突然のこと過ぎて戸惑っていたけれど、少し震えるその腕に気づいた俺は、自由なほうの腕をそっとその背に回した。

シャラン、と音を立てて、繋がったままの手が頬に寄せられる。

見上げると、酷く情けないほど不安そうな表情をした先輩の瞳とぶつかった。

「なんて顔してんですか」

困ったように微笑むと、一瞬の間の後、強く唇を奪われた。

「んっ、ふ…っ」

ちゅっ、くちゅっ、と重ねられると同時に、洩れ聞こえるその水音に羞恥心を煽られる。

かつてないほど荒々しく施される口付けに、流されるがままに飲み込まれていった。

「凜……り、ん……リンっ！」

「あっ、はあっ……、も、や、め……っ」

角度を変えて何度も深く重ねられる口付け。
酸素を求めて口を開けば、熱く濡れたものが差し込まれた。

「んう、く……あ、は……あっ」

歯列をなぞり、上顎を舐められ、口腔を犯すように丹念に搾り取られていく。

舌を絡め取られると、ジンと痺れるほどにきつく吸われた。

（何で……俺、キスしてんだろ……）

ボーッと痺れる頭のどこかで考えるけれど、強すぎる口づけに思考が上手く回らない。

与えられるままにその熱に翻弄されていった。

「リン……僕は……」

「……あつ、はあ……」

なに、と続けようとした言葉は、吐息に攫^{さら}われて音も無く消えていった。

白い雪。

薄紅色の花びら。

その先にいたのは………

血に塗れた、あの人。

第十八話（前書き）

少しでも残酷描写があります。
苦手な方はご注意願います。

第十八話

それは突然のことだった。

新月の夜、星の瞬きが雲に隠れて、一瞬の闇が生まれた瞬間。目の前の大切な存在が、あっという間に姿を変えた。

銀の美しい髪は漆黒に。

あか あお そうぼう 紅と碧の双眸は真紅に。

その姿は……いつか聞いた、魔女の力を受け継ぐ者と合致していた。

容貌を変えた妖は、あやかし真っ直ぐに己を見つめ、その手に持つ刃をこちらへと向けた。

「シュー……ラン………？」

どうして、と続けようとした言葉は、音にならなかった。

恐怖よりも、悲しみよりも、何故という思いしかなかった。

不思議なほど落ちて置いていて、純粹に、そう……ただ彼を信じているだけだった。

「何故なのだ……」

なぜ？ それはおれが聞きたいよ、シューラン。

「何故、私を憎まない！？ どうしてお前は……っ、私はお前を害そうとしているのに……！ そのような瞳で私を見ないでくれ……っ！」

苦しそくに言葉を繋ぐシューランに、俺はただ、見つめることし

が出来なかった。

俺を殺したいなら殺しても良いよ。
ゆっくりと、その思いが伝わるように笑った。

「私は異形だ。呪われし忌み子だ。魔女の血を受け継ぐ者なのだ。その強大な力の代償は、己の命。私に残された時間はあと10数年しかない。ただとお前を、お前の受け継ぐその血を……」

この身に宿すことが出来れば、と呟いた言葉は、風に攫われてすぐに消えていった。

「ねえ、シューラン」

普段は大人で、自分をからかってばかりで、だけど凄く優しいその存在に声を掛けた。

今にも泣き出しそうなほど不安定なこの人に、自分がしてあげられることなんてほとんどない。

だけどそれでも。

「おれのいのちがひつようなら、いくらでもあげるよ」

出来ることがあるのなら、おれはためらったりしないよ。
だから。

「だから、すきにしていよいよ」

それだけ伝えると、そつと目を閉じて衝撃が訪れるのを待った。
出来ればあんまり痛くしないで欲しいな、と思ったけれど、それさえもシューランに任せようと思った。

しばらくじっとしていたけれど、一向に動く気配がない。

カラン、と何かが落ちる音がした。

不思議に思つて目を開けると、刃から手を放し、呆然と立ち尽くす彼の姿が見えた。

「シューラン？」

どうしたの、と声を掛けて近づき、その手に触れると、冷たく震えているのに気が付いた。

「だいじょうぶ？ さむいの？」

心配になつて両手で手を包むと、あつたかくなるようにぎゅっと握り締めた。

すると、突然シューランはもう片方の腕で自分を強く抱きしめてきた。

僅かに震えている身体。

少しでも震えが止まればいいなと思い、シューランの手を温めていた手を片方だけ外して、そつとその手に腕を回した。

小さな手では包みきれないほど大きな手のひら。

けれど優しくて温かいその手が、俺は大好きだった。

あやかし妖故に、温度を持たないと以前言っていた。

だけど自分にとっては、いつだって温かかった。

不安も、寂しさも、孤独も、すべてを包んでくれたその手を持つこの人が、自分にとって何よりも大切な存在だったから。

「おれは、シューランがだいすきだよ」

自分の命よりも、何かを優先しようとして悩むほど優しい人。

俺のことを考えてくれるのは嬉しいけれど、シューラン自身を失うほうが嫌だった。

死なないで。

俺に出来ることがあるのなら、シューランを失わないで済むのなら。

何だって、するよ。

「リン……私は、」

「だいじょうぶだから、ね？」

そういつて、抱きしめられていた居心地の良い場所から手を放した。

地面に落ちたままの刃の柄^{つか}を両手で掴み、シューランの力の源である桜の木の下へと進む。

「リン、お前何を」

「おれはこのきも、シューランのおやしきにいるひとたちも、だいすきなんだ。みんなだって、シューランのこと、ほんとほだいすきなんだよ」

だから悲しい顔をしないで。

本当は、寂しくなんてないんだよ。

「おれにはもう、だれもいないけど、シューランにはシューランのことがだいすきなひとたちが、いっぱいいるから。だから、だいじょうぶなんだよ」

俺がいなくなっても、独りじゃないよ。

「みんなを、だいじにしなくちゃだめだからね」

「リン！ 何をしている……っ。私には、お前が」

だから、笑って？

「シューラン、だいすき。だから、またね」

また、何処かで出会えますように。

「リン！！」

そして俺は、その手にした刃を胸に突き立てた。

第十九話

「馬鹿な……っ！ リン、死ぬなっ！！ 私には、お前が……！」

震える声で自分の名を呼ぶ人がいる。

けどもうすぐ聞こえなくなるのだろう。

意識が遠くなっていく中で、薄っすらと見えたその人は、自身の血に塗れて自分の身体を抱きしめていた。

「エイ！ カナメ！」

「はい、ここに」

「はい、ただいま」

「私には……リンを殺せない」

「……………」

「……………」

突き立てた刃とそっと引き抜くと、シューランはその刃で腕に傷を付けた。

「…………… よろしいのですか」

静かに問いかけるエイの声には答えず、シューランは己の血を傷口に落とした。

ぼうつと白い光を発すると、少しずつ傷が癒えていく。

温かい……シューランみたいだな、と思っていると、暗闇に意識を奪われた。

「すまない、リン」

辛そうな声が聞こえると、頬に濡れたものが落ちたような気がした。

「フェルーナ様」

使い魔に呼ばれるけれど、その声には答えなかった。
じっと座ったまま、ベッドに横たわる小さな存在の手を握り締める。

いつもより体温が低くなってしまった愛しい子供。
その命の灯火は、今にも消えてしまいそうなほど儚いものだった。
どうしてこの子に刃を向けられたのだろう。
このまま、運命に逆らうことなく消えていこうと決めていたのに。

「フェルーナ様、そろそろお休みになられてください」

もう一人の配下が休めと催促してくるけれど、無言で制した。
休む？

そんな必要など、自分にはないのに。

眠り続ける凜の黒髪をそっと撫でると、サラサラと指の隙間から
零れ落ちていった。

以前、自分の髪が綺麗だと言ってくれた子。

オッドアイ

呪われし両目だと知ってもなお、自分を好きだと言ってくれた愛しい存在。

「私には、お前が必要なのに……」

もう、傍にはいられない。

これ以上一緒にいてしまったら、また一族の者が凜の血を求めてしまっだろう。

たかが自分一人の生命を延ばすためだけに。

人間からしたら、それは途方もない時間だろう。

残された10数年という時間は、人間にとっては長くとも、自分たちのような妖あやかしにとっては瞬きほどに短いものだ。

それなのに、たった数ヶ月しか一緒にいなかったこの時間は、これまでの長い生命の中で最も蜜のあるものだった。

空虚の中で生きてきた自分にとって、これほどまでに誰かを感じたことなど無かった。

人間など、自分たちにとっての糧かてでしかなかったはずなのに。

「リンの傍にいと、今までは感じなかった餓えが酷くなってしまっうのだ……」

お前の血が欲しい、と。

その本能は、己の生命が脅おびかされるほどに酷くなっていくと言う。残り少ない時間の中で、自分は凜にとって化け物以外の何者でもなかった。

守りたいのに欲してしまう。

大切にしたいのに奪いたい。

本能と理性がせめぎ合う中で、異形である自分はいつか本能が打ち勝つだろう。

僅かに触れた甘い血。

その血を得た瞬間、震えるほど満たされていくのを感じてしまった。

もっと。

深く。

その身を捧げろ。

自分の中の獣がそう囁くのを確かに聞いてしまったのだ。

「エイ」

「はい」

「私は……………間違つて、いるのだろうか？」

「……………はい、そうですね」

澱みなく答える臣下に、僅かにピクリと反応してしまう。

しかし、強靱な精神を持つエイは、表情を変えることなく淡々と続けた。

「しかし、私にも出来ませんでした」

「……………？ どういうことだ」

「あなた様よりも先に、この子供を抹殺するよう指示が出ておりました」

「……………！ 元老院か」

元老院。全ての一族を束ねる組織。

自分をこの屋敷という名の牢獄に閉じ込めたのも、かつて一族のものを消すことを決めたのも、力に溺れたものたちだった。

「はい。消したのち、その軀と共に納めることであなた様の力を取り戻し、元老院がその力を利用しようとした模様です」
「……………」

あのクソたぬきジジイどもめ、と毒吐きたい気持ちでいっぱいだったがグツと堪える。

今はそのようなことを言っている場合ではなかった。

「けれど、不思議な子ですね。私がフェルーナ様を閉じ込めている元凶であると分かっているようでしたが、あなた様に向けるものと同じように笑っておりました」

「分かっていた、だと？」

「はい。私がフェルーナ様の監視者であるのか、と……同じような意味合いで問われたことがあります」

「子供だと思っていたが、意外にも良く見ているのだな」

困ったヤツだな、と少し笑いながら、そつとその頬に触れた。子供特有のふつくらとした柔らかい頬。

閉じたままの瞼の下には、真っ直ぐに自分を見つめる漆黒の瞳があるはずだった。

早く目を覚まして欲しい。

もう一度、その瞳で自分を見つめて欲しい。
厭いとわしいと思ったばかりのその視線が、今では恋しくて仕方なかった。

「ええ、そうなのです。私がそれを聞いた瞬間、躊躇ためらっているのに気が付いたのか、何事もなかったかのように笑いかけておりました」
「それで、お前は殺り損ねた、と言いつけるのだな」
「……いいえ。戦意が削がれただけです」

フィと素知らぬ顔をするこの配下など見たことがなかった。
もう一人の使い魔など、驚きすぎて固まっている。

「まあ良い。お前がコレを欲したとしても、それは叶わぬことだからな」

「……元より承知でございます」

「そつか。ならば、エイ、カナメ」

「はい」

「……はい」

「私はこの地では無く、別の地で最期を迎える。リンが復調次第、移動を命ずる。すぐに準備に掛かれ」

「「御意に」「」

元老院を納得させ、屋敷を移動させることは面倒でもあり、多少の困難はあるだろう。
しかし。

「お前を納得させることの方が難しいと思うのは、何故なのだろうな……リン」

あと少しだけ。

もうしばらくは傍にいらせて欲しい、とその愛しい子供の額に口付けを落とした。

第二十話

目が覚めると、いつもとは違う白い豪華な壁が見えた。

うーん、と寝返りをすると、さらりとした気持ちの良いシーツが肌をくすぐった。

「あれ、なんでおれ、ねてたんだろ？ ……てかここ、シューランのおやしき？」

何故自分がシューランの屋敷の部屋で寝ていたのか分からず、伸びをしながら周囲を見回した。

するとすぐに、傍らに座ったまま眠るシューランの姿が見えた。

「シューラン……？ こんなとこでねてたら、かぜひいちゃうよ？」

いつも自分が注意されていることなのに、シューランってば人のこと言えないじゃん。と思いつつも、さっきまで包まれていたシーツを引っ張って、シューランの肩に無理やり掛けた。

「うーん、しょっと。これでいいかな？ シューランがねてるなんて、めずらしー」

しげしげと物珍しいものを見つけたように、のんびりと観察をする。

というか、この人が眠っているのを初めて見た。

いつも会うのは昼過ぎから夕方に掛けてだし、たまに朝早くに来て、いつだって起きていた。

寝起きで寝ぼけたところなんて見たこともないし、そもそも寝て

いるシューランを想像したことがない。自分はいつも、天気の良い日は桜の木の下でお弁当を食べて、ウトウトしてしまったり、そのまま寝ていたりすることなんて日常茶飯事だ。

時折、こうしてお屋敷の部屋までシューランが運んでくれることもあったくらいだ。

「あれ……おれ、なにしてたんだっけ？」

確か、今日は泊まって行っても良いと言われ、夕飯を食べた後で星を見に外に出たような……そこからの記憶が全く出て来なかった。

「まあ、いつか。そーだ！ エイさーん、カナメ」

パタパタと駆け足で扉を開け、屋敷のどこかにいる二人の名を呼ぶと、すぐにエイが姿を現した。

「リンさん、どうされたのですか？」

「もー！ さん、とかやめてっていつもゆってるのに……あとていねいなのもダメっ」

「ああ、すみません、クセなものでして。では、リン。どうかしたのか？」

「うんっ、それでいいよつ。あのね、シューランがめずらしくねちやってるの。かぜひかないかしんぱいで……」

なんとかして？ と頼むと、エイは柔らかに微笑を浮かべると、すぐに部屋の中へと滑り込んでいった。

「ボクを呼んだりした？ リンちゃん」

「あ、カナメ！」

「何でボクだけ呼び捨てなのさー！ エイだけ鼻^{ひいき}屑しすぎじゃない？ リンちゃんってば！」

「だって、カナメってばいつもおれのこと『ちゃん』づけすんだもん。やめてくれたらかんがえるよー」

「だってリンちゃんはリンちゃんでしょう？」

「ちがうし！ おれおとこだし！！ まあいいや、そんなことよりさあ〜」

おれどうしたんだっけ、と聞こうとした瞬間、バタン！！ ともの凄^ひい音と共に扉が開かれた。

「リンー！！」

「あれ、シューラン、おきたの？」

のんびりとした口調で、かぜひかなかった？ と告げる前に、その広い胸の中に囚われた。

「うわっ」

「リンッ、この馬鹿者が……！」

「えっ？ ええっ？ ちょっ、どうしたの、シュー…ランっ！ 苦しいよ……っ」

よく分からないままぎゅうぎゅうと抱きすくめられ、抵抗する気も起きずにされるがままになっていた。

けれど窒息死するのは嫌だったので、ぽかぽかとその胸を叩いて力を緩めてもらう。

それでも一向に離してくれる気配がなかったので、足りない短い腕をぎゅっとその背に回して抱きしめ返した。

「シューラン……？ だいじょうぶ？ どっか痛いの……？」

「それは私の台詞だ、この馬鹿……！」
「ええ……なんで!？」

抱きしめられたと思ったら怒鳴られた。
なんでおこられてんの!？

うん、と考えても分からなかったので、とりあえず謝っておくことにした。

「よくおぼえてないんだけど……ごめんね？」

「お前が謝るなっ」

「うえーん……ますますいみがわかんないよーシューラあーん」

半ばベソをかきながら抗議するけれど、教えてくれなさそうだった。

助けを求めようとエイとカナメに視線を向けるけれど、エイは云々と頷いているだけだし、カナメに至っては呆れたような顔をされた。

……だからなんで!？

「どこも痛くないのだな!？」

「ふえ……うん、おれはいつでもげんきだよっ」

「そうか……。頭がふら付いたり、どこか具合が悪い部分はないのか？」

やたらと心配してくるシューランが不思議で仕方がなかったけれど、どこも変わったところはないと教えてあげる。

いつもならヘンなのって言うところだけど、ちゃんとかわないかどうかになってしまいそうなくらいシューランの様子がおかしかったから。

「うん、だいじょーぶ。けど……」

「けど、なんだ!？」

「えっと、おれ……ねちやうまえのこと、おぼえてないんだけど……」

「おれ、なんかしちゃった?」

「……っ!」

正直に告げると、自分を抱きしめていた腕がピクリと震えるのが伝わってきた。

……やっぱり何か迷惑を掛けてしまったのだろうか。

不安になってシューランを見上げると、戸惑うように眉間にしわを寄せていた。

「シューラン? やっぱりおれ、めいわくかけちゃったの?」

「……ああ、いや、そうではないのだ。お前のことが迷惑など思ったことは一度たりてない」

「そうなの?」

きょとん、と見つめて問うけれど、難しそうな顔をしたままのシューランが不思議でならなかった。

自分が迷惑を掛けたわけではないのなら、どうしてそんなに苦しそうな表情をしているのだろう。

「ああ。だから、今日はもう寝ていなさい。身体に障さわる」

「ええー! せっかくシューランといえるのに、ねるなんてもったいないよっ!」

「ならぬ。あとで話でもしてやろう。だから今はベッドに戻りなさい」

「うう……シューランのけちい」

「私はケチなどではないっ。早くせぬならベッドに括り付けて数日遊んでなぞやらぬぞ」

「うえええええええつ、それはいやっ！ わかったつ、わかったからベッドにしばらくのはやめてええええええええええ！！」

「わかったのなら良い。カナメ、リンを部屋へ連れて行け。私はエイト話がある」

「なんでボクが……ってハイッ！ 分かりましたからすぐにモノを投げるのは止めてくださいよおおお！」

ぎゃーぎゃー騒ぎながら急いで部屋へと向かう。

この際、シューランの怒りはカナメ一人が受ければいいよな、と薄情にもカナメを見捨てることにした。

だつて怒ったときのシューランってホントまじで怖いんだもん。ガシャンとモノが飛ぶ音を聞きながら、走って部屋へと戻っていた。

執務室とは名ばかりの、書斎代わりの小さなめの部屋にエイを呼びつけた。

ほとんど使われていない大きな机に手を置きながら、これからの事を思う。

幸いにも、自身の血を使ったことによる弊害は今のところ起きていないようだった。

眠り続ける凜が心配でならなかったが、もう大丈夫そつだ。

仮にもし、何か異変が起きたとしても、魂の誓約がすぐさま己に伝えてくるだろう。

もう傍に、いる必要など何処にも無かった。

「明日、だ。明日の宵、^{よい}リンに全てを話す」

「……御意」

「あの子は……怒るだろうか」

「…分かりません。しかし」

「だが、なんだ」

「リンさんは、レイン様の血族と陰陽の娘一族の血を受け継ぐ唯一の者。……レイン様が魔女であるフェルナー様の母君を受け入れたのなら、同じように全てを受け入れるように思います」

「……そうか。皮肉なものだな」

そつと、部屋の窓から見える、屋敷の庭に大きく聳え立つ大木を見つめた。

かの血族である凜の血を僅かにでも得たためなのだろう。

以前よりも力を増し、より強く咲き誇る紅色の華。

自身を呪った一族の血と、自身の一族を愛した一族。

その両方を兼ね備えた唯一の子供。

心はその存在を欲して止まないのに、身体はその血を奪わなければならない。

その矛盾が、こんなにも己を蝕むはじむなどと思ってもみなかった。それでも。

「出会わなければ良かったなどと思えない私は、もう妖あやかしでも人間でもない、ただの異形なのだろうな」

零した言葉に、エイは答えられなかった。

第二十一話

翌日。

ようやくベッドから開放されて、いつものようにシューランと一緒に大木の下でまったりとしていた。

変わった御伽噺おとぎばなしをもらったり、エイが作ったおやつと一緒に食べたり。

その中でもゴロゴロしながら髪を撫でてもらうのが一番好きな時間だった。

「シューランのカミって、なんでこんなにキラキラしてるんだろーね」

さらりとした手触りが気持ちよくて、ずっと触れていたいのに、あまりにもサラサラとしすぎてあつという間に手の中から零れ落ちてしまう。

何度も試してみるけれど、やっぱり掴むことが出来なかった。

「……何をそんなにムキになっているのだ？」

「だって、とってもキレイだから。シューランってどうしてそんなにキレイなの？」

至って普通に疑問に思っていたことを口にすると、シューランは困ったような笑みを浮かべて母親譲りの真っ黒な髪を優しく撫でてくれた。

「私は、綺麗などではない。むしろ、お前の方がよっぽど綺麗だ。この漆黒の髪も、その身も、その心も……私には、眩しいほどに」

そういつて、少し目を細めて見つめてくるけれど、自分が綺麗だなんて納得がいかなかった。

自分に向けてくる優しい視線も笑顔も、綺麗以外にどう表現していいのか分からないくらい、キラキラしてて、どうしてか分からないけどドキドキもした。

「……………どこだよ？ おれ、キレイよりカッコイイがいいなっ」
「くっくくっ。お前は相変わらず面白いな」
「ええ！？ なんでだよ！？」

意味わかんない、と苦情を出すけれど、笑ってばかりで答えてはくれなかった。

「さて、そろそろ日も暮れる。…………もうおうちへお帰り」
「やだっ。もっとシューランと一緒にいたいし遊びたいよっ！」
「ふふ…………困ったヤツだな。いつか、お前も私のことを忘れてしまふのに」

「そんなことない！ なんでいきなりになんかと言っただよ！？」
だってシューランはいつもおれとあそんでくれてるじゃん。おれ、シューランのこと、わすれたりなんてしないっ」

いつもだったらそんなこと言わないのに、どうして急に突き放すようなことを言うのだろう。

このまま別れてしまったら、もう二度と会えないような気がして怖かった。

「ね、『やくそく』してっ。ずっとずっと、えいえんに、いつしよにいられる『やくそく』」
「永遠に？」

「うんっ。おれ、シューランのことだいすきだもん。ずっとずっと、

いつしよにいたい。オトナになっても、それから」

「お前が大人になっても、か……」

その時まで、自分は生きていられるのだろうか……と呟いた声に、
気付くことが出来なかった。

「おれ、シューランのイチバンでいたい。……だめ？」

懸命に、そう……絶対に譲れない、シューランが大好きという気持ち
を言葉にするけれど、まだ幼い自分では上手く伝えられなかった。

それでもどうしても一緒にいたくて、傍にいたくて。

『永遠』なんて不確かな言葉を口にするしか無かった。

「お前が私の一番になってしまったら、困るのはお前の方なのに……」

「なんでそうゆうコトいうんだよ。おれのこと、そんなにキライ
だったのかっ？」

「そうではない。お前が嫌いだとかそういうことなのではなくて……」

……ただ、私は ヴァンパイア、なんだ。お前と共に生きる
には、支払う代償が大きすぎる」

「ばんぱいあ……？」

聞いたことのない言葉。

それが何だというのだろうか。

別にシューランが何であろうと、自分には関係ない。そう言うおう
としたけれど、「そうではないのだ」と制止されてしまった。

「リン、良く聞きなさい。私やエイは、ヴァンパイアという妖^{あやかし}……、
人ではない存在なのだ」

「人じゃ、ない……？」

人じゃないものって何だろう？　と思うけれど、答えは出てこなかった。

「そうだ。私たち異形は、人間の血や精を力としている。睡眠もほとんど必要としないし、食事も本来は口にしない。つまり……人の生命力が、私にとっての食事であり睡眠なのだ」

「人が……ゴハン……」

「そう。このまま一緒にいれば、いずれ私はお前を食事にするかも知れないのだ。そんなお前と生を共にすることは難しい……すまない、リン」

言われたことが難しくて良くわからない。

けれど、このままじゃもう会ってなくなるのかもしれない。それだけは、どんなことをしても嫌だった。

ゴハンが必要なら、自分がそうなれば良い。

血の気は多いほうだし、痛いのは嫌だけど、シューランと一緒にいられるなら我慢する。

何でもする　　そう自分の中で答えが出るのは早かった。

「それでもいい。シューランといっしょにいられるなら、おれがゴハンになる。いのちと、シューランのことがいだったら、おれがもってるものぜんぶ、シューランにあげるから」

「リン……」

「おれのもってるものなんて、ぜんぜんすくないけど。でも、それでもおれにとってはシューランがイチバンだから。いのちがひつようだっていうなら、あげるから。だからそれまでは、いっしょにいたいよ」

離れるなんて絶対に嫌だ。

傍にいてくれるなら自分は何だってする。

他にどう伝えたらいいのか分からなくて、ぼろぼろと涙が込み上げて来るけれど、男は泣くもんじやないと必死に言い聞かせ、袖口で拭^{ぬぐ}った。

「リン、瞼^{まぶた}が腫^はれるから止めなさい」

「……っ、だつてえ……ひつく……っ」

どうしても嫌なんだもん、と駄々をこねると、涙を拭^{ぬぐ}うようにそっと柔らかな唇が当てられた。

「シューラン……？」

「本当にお前は……困ったヤツだな。一度だつて私の思う通りになどなつてくれない」

ちゅっとして軽く零れた雫を吸われ、優しく頭を撫でられる。

さっきまでの難しい雰囲気は何処かへと消え失せ、いつも以上に温かい空気を纏^{まと}つて頬に触れてくれた。

「分かった。それじゃあ約束をしよう」

「やくそく……？」

「ああ。私は今から、お前の中にある私との記憶を消す。お前が大人になって、それでも私のことを思い出すことが出来たならば、私はお前の一番になるう」

「ホントウー!？」

「もちろん。ただし……」

「ただし？」

「お前が十七を迎える刻^{とき}までだ。それを過ぎたら、私はお前に関する一切のことを忘れよう。それでもいいのか……？」

何で十七なんて中途半端なって言ったら怒られた。

僅かでもこの人と一緒にいられるのなら、何だっするし、出来るような気がした。

「わかった。『やくそく』するっ」

そうして俺は、約束をしたんだ。

この人と一緒に生きるために。

第二十一話（後書き）

ようやく過去編が終わりとなります。

場面移動がわかりにくくて申し訳ないです。

誤字脱字報告、感想・評価など、よろしくお願い致します！

また、随時活動報告の方にも情報掲載しておりますので、ぜひぜひ遊びにきてくださいね！

第二十二話

どれくらいの間、そうしていたのだろう。

辺りを照らす光は星の瞬き以外他にはなく、暗闇に慣れた瞳でさえも互いの顔を近くで認識出来る程度だった。

鷹司先輩はじつと自分を抱きしめたまま動こうとはしない。

耳元をくすぐる吐息と、夜風を舞う音だけが周囲を支配していた。真紅の花びらがひらひらと踊り、まるで意思があるかのように自分と鷹司先輩の周りを舞っていた。

突然フラッシュバックされた過去。

どうして急に、あんなことを思い出せたのだろうか。

ずっと会いたかったのに、ずっと知りたかったことが分かったのに、どうしてシューランよりも目の前のこの人が気になってしまっているんだろう。

自分で自分の気持ちだが、分からなくなっていた。

（本当に知りたいのは……この人？）

そんな馬鹿な。

確かに知りたいとは思ったけれど、自分にとっての一番はシューラン以外ありえないのに。

（どうして……俺、こんなにも……迷ってるんだよ）

グラグラと揺れる自身の精神。

シューランがヴァンパイアで、目の前のこの人もそれっぽいのなら、何処かで二人は繋がっているのは確かだ。

英先輩も、四柳院も。

姿形は当時と違っていているけれど、人でない存在なら変えることも容易なことなのかもしれない。

でも今はそのことよりも、不安げに自分を抱きしめる腕が気になつて仕方がなかった。

「センパイ……？　だいじょうぶ……ですか…？」

自由な方の腕を回して、そつと優しくその背を撫でる。

繋がれたままの手を伸ばして軽く触れ、僅かに震えるその手を暖めた。

（何だか……あの時みたいだ）

思い出したばかりの記憶と現在いまが交差する。

この状況が既視感デジャヴを生み出し、事実あったことだった。

あの時と同じように、目の前のこの人は何かを迷うようにしている。

「俺に、どうして欲しいですか……？」

「……っ」

半ば確信を持つように問いかけると、鷹司先輩はピクリと肩を震わせた。

何かを恐れるように。

何かを知っているかのように。

「僕にそんなことを言っているの……？」

「え……」

「その身体が欲しい、その心が欲しいって言ったら、キミは僕に全部くれるの」

「……………何、を」

言っているのか分からない、と告げる前にぐいと髪を引っ張られ、強引に上向かされた。

痛みを感じているのは自分なのに、そうさせている鷹司先輩の方が何故か辛そうにこちらを見つめていた。

（どうしてそんな顔をしてるんだよ……………？）

教えて欲しい。

自分を欲しがる気持ちも、その心の中で何を隠しているのかも。辛いならそう言ってくればいいのに。

今まで思ったりしたいこと全部、自分勝手にやってきたくせに。どうして今更そんな顔をするんだろう。

（そうだよ、俺なんかじゃなくてもいいじゃん。他にいっぱいハーレムの連中がいるんだから、そいつらだって構わないくせに……………）

そう自分に言い訳するけれど、本当は違うことくらい……………もう分かっていた。

補習の代わりと称して生徒会の手伝いをし始めた時から、この人がそういった人たちと遊んでいるところをほとんど見たことがない。夏休み中もいつも何処かへ姿を消すけれど、いつだってちゃんと仕事をしていた。

自分はもう……………この人のことを信頼しているくせに、意地っ張りな心がそれを認めたがらなかったただけだ。

自分だけだと、言っただけで。

「どう……………して？」

「何……………？」

「センパイは、どうして俺なんかを欲しがるんですか……？ 俺、センパイのことが分らない。けど、分らないことをそのままになんてしておきたくないし、センパイにしてあげられることがあるのなら、なるべくしてあげたいって思います。全部と言われてもどうすればいいのか分らないし、分らないからどうすればいいのか分らないけど……でも、ちゃんと分りたいって思います」

「リン……」

「俺、さっき言いましたよね？ 『センパイのこと知りたい』って。だから、ちゃんと教えてください。寂しいなら寂しいって言ってください。特別に何かは出来なくても、傍にいたいことくらいなら出来ます」

これが本当の気持ち。

誤魔化したりしてちゃんと向き合って来なかった、本音。

シューランのように何処か寂しげなこの人が、知りたいんだ。振り回されるだけじゃなくて。

流されるんじゃなくて。

本当のこの人を 見たい。

「俺、今ならアンタのこと……ちゃんと、見れると思うんです」
「……………」

僕自身を見て欲しい。

以前、そう言っていたこの人。

その時の自分は、シューランのことで頭がいっぱいで、それ以外のことなんて何も考えられなかった。

だけど今なら違う。

シューランはもちろん大切な存在だけど、この人のこともきちんと考えなくちゃいけないんだってことが……もう分かってしまったから。

「リンは……優しいね」
「……は？」

不意に掴んでいた手を放し、解放される。
ガクンと後ろに倒れそうになるけれど、寸でのところで耐え切った。

相変わらず問いには答えてくれず、困ったような笑みを向けられるけれどどうすればいいのかわからない。

戸惑うこちらには気にも止めず、制服のズボンのポケットから鍵を取り出した。

「な……んで」

ソレを持っているんだ？

そう問いかける前に、シャランと繋がれた枷を解いた。

手首は自由になったけれど、心はそれに付いていけない。

立ち止まったまま鷹司先輩を見上げると、何処かを諦めるような微笑みを浮かべていた。

「僕はリン……キミが好きだと、言っただね」
「……はい」

確かに、言われた。

冗談だと思っていた言葉。

からかわれているんだと思っていたその台詞。

だからそれに対する答えを今、持ち合わせてなどいなかった。

答えないことが分かっているように、鷹司先輩は何も追求してこない。

それでいいのだと……ずっと甘えていた。

「けどね、僕は……」

一瞬、低くなった声にドキリとする。

「同情で好かれるほど、落ちぶれてはいないんだよ」

「え……？」

「キミが哀れな化け物のために心を痛める必要なんか……何処にもないんだ」

「ちよっ……なに、言つて」

「優しいキミが確かに好きだったけど……優しさは時に残酷なんだよ　覚えておいて」

「……っ、センパイ！」

じゃあ、と去って行く先輩は、まるで別人のように冷たく感じられた。

さっきまで触れられていた箇所は、夜風に攫さらわれて温度をなくしていく。

それと同時に遠ざかる先輩を追いかけることは……出来なかった。

「もう……っ、意味が、わかんないよ……っ！」

何もかもがぐちゃぐちゃで、分かることなんて何も無かった。

知りたいと願った自分。

教えてはくれない先輩。

全てを知っているかのように咲き誇る桜は　その心が離れていくかのように、真紅から薄紅色へと変わっていく。

「知りたいって願っちゃ……いけなかったのかよ……っ！」

シューラン!!

昔も今も、上手く生きられない自分が……無性に腹立たしかった。

第二十二話（後書き）

おかげ様でユニークアクセス数が6000人を突破いたしました！
本当にありがとうございます！！

これもひとえに、気長に待っていてくださる読者さまのおかげです
！！

活動報告のほうでは現実での活動などを記載しておきますので、よろしかったら遊びに来てくださいね

第二十三話（前書き）

お待たせいたしました。

ようやく復帰出来そうです。

少々無理やり感が否めませんが。。。

楽しんでいただけたら幸いです。

第二十三話

人生は、どうしてこんなにもままならないんだろう。

目の前にある大切なものさえ守れず、手にしようとした途端にあっけなく消えていく。

僅かな時間の中を自分なりに生きてきたつもりだったけれど、結局何一つ、この手に掴むことさえ出来なかった。

「どっちも大切、だなんて……我侭だよな」

同情なんかじゃない、好きだ、って、とっさに言えなかった。

好き……？

自分は、あの人のことを、シューランのように好きだったのだろうか。

いや、好きだった、ではなく、好きだ、の間違いかもしれない。そうでなくちゃ、この胸の中を荒ぶる感情に説明が付けられないかもしれないからだ。

「……は、あはは……俺ってなんて馬鹿なんだろう……っ」

失ってから、恋をしていたことに気がつくなんて。

「どうして欲しい、なんて言わなきゃ良かった……」

そこに自分の意思なんて無かった。

他人に自分の行動を求めるなんて、失礼にもほどがあるんだと、今になって気がつく。

それよりも先に　　自分がどうしたいのかを理解していなく

ちやいけなかったのに。

「いかな、きゃ……っ！」

今ならまだ間に合うかもしれない。

自分の気持ちに、まだ整理が付いていないのは本当だ。だけど。

「このままなんて、そんなの絶対だめだ」

後悔したくない。

また、大切な人を失いたくなんてない。

我尽でも、理不尽な気持ちだとしても。

何もしないまま諦めるなんてこと、出来るはずがなかった。

暗闇の中を注意しながらも最速で駆け抜けていく。

焦る気持ちと、自覚したばかりの気持ちを胸に抱きしめながら、どこにいるかも分からない天邪鬼な男の影を追っていた。

（何でか……なんて、そんなのわかんない。だけど、そんなのどうでもいいんだ）

この気持ち、恋とか愛とか、そんな言葉で括れるようなものなんかじゃなくっても。

（ただ傍に…… ）

いられたら。

「う、わぁっ」

足元を遮るのは、先輩があらかじめ用意したであろうトラップの数々。

ネズミ捕りのような原始的なものもあれば、タイミングよく飛び出してくるお化け（のようなもの）など様々だ。

なんでこんなものを、と思うけれど、だからと言って侮ってはいけない。

原始的なものはそれなりに有効だからこそ、考え出されたものなのだから。

そうこう考えているうちに、油断すればすぐに引つかかってしまいそうになる。

そのせいで走るスピードな否応なしに減速することを免れないし、だからこそこの罠がある意味があるんだろうとも思う。

「そんなとこまで考えなくってもいいのに……よっ、と」

ぴよんとタイミング良く避けながらも、段々と慣れてきてスピードを上げていく。

一つもトラップが発動されていないけれど、なんとなく、こっちの方を彼が通ったような気がしていた。

「つかコレってもう肝試しの域を超えてんじゃね？　って……ちょっと、あぶねっ！」

最早一つのアトラクションと化してきた障害物の多さに辟易しながらも、何だか楽しく感じてくるのは何故だろう。

もしも二人で一緒にココを通っていたのなら、文句を言う自分と、笑いながら軽々と諷めてくる先輩の姿が簡単に思い浮かぶ。

何だかんだいいながらも、一緒にいて楽しかったんだと今になってようやく自覚した。

「とりあえず、見つけたら文句の一つでも言ってやらないとな」

もう一度心にそう強く決めて、ようやく見えてきたゴールへと駆け抜けていった。

「センパイっ！」

寂しげに佇む鷹司先輩を見つけると、いてもたってもいられずに俺は叫んだ。

ゆっくりと振り向く先輩の瞳は、冷たい非難の色と怒りに染まっているように見えた。

だけどそんなことは俺には関係なんてない。

どれだけ嫌がられようと、罵倒されようと、自分のしたいことをするまで俺は引き下がることなんて出来なかった。

「……何しにきたの？ キミの顔なんて、見たくなんてないんだけど」

「っ……！」

当然のように放たれる射抜くような冷たい視線と言葉。

だけどそれでも、俺は言わなくちゃだめなんだ。

グツと唇を噛み締め、いろんな思いが交差する心をなんとかなだめて先輩へと向き合う。

ゆっくりと呼吸を落ち着かせて、一度だけ確かめるように深呼吸をした。

「一言だけ、言わせてください」

懇願するように、だけど揺るがない決意を見せるように、そつと言葉と紡いだ。^{つむ}

「俺は、同情なんかじゃなくて、今までアンタと一緒にいて楽しかった。だから、これからも一緒にいて欲しいと思ってる」

「……………っ！」

「俺には確かに、アンタとは別の人がずっと好きだったよ。それは今も……そうなのかもしれない。卑怯だって、ズルイって自分でも分かってるけど、だけどそれでも、その人と同じくらい、アンタのことも好きなんだ」

俺のしたいこと。

して欲しいこと。

それは誰が見ても理不尽で、我侭な言い分だってことは分かっている。

だけどそれでも。

「それが、俺の心からの本心なんだ」

嘘偽りの無い、気持ち。

どれだけ矛盾していることを言っているのか、そんなの誰に言われなくても分かっている。

本当は今だってシューランを諦めることなんて出来なくて。

だけど鷹司先輩を失うことも嫌で。

そんな到底叶うハズのない願いだって分かっているけれど。

だからと言って、簡単に選べるほどどちらも失うことの出来ない、大切な……想い。

「……クツ、ふふふ……」

唐突に笑い始める鷹司先輩に困惑の視線を向けるけれど、尚も止まることなく笑い続けている。

「……？ 俺、なんかヘンなこと言っただけ！？」

「クククツ……はっ、まいったね」

「はいッ！？」

「どうしてキミは……そんなにも、強いんだろうね」

「……言ってる意味が全然まったく分かりませんよ……」

なんでアンタはいつもそうなんだ……と突っ込みを入れるけれど、いつものような雰囲気の流れで少し嬉しくなった。

止めても無駄なので放っておくと、やがて諦めたように笑い声が収まった。

「……おいで、僕の凜。キミに、愚かな男の話をしてあげよう」

不意に真剣な眼差しを向けられて、ゆっくりとその手を差し出された。

答えは返って来ていないけれど、その手が答えのような気がした。俺はそつと腕を伸ばして、少しばかり緊張しながらその手を取った。

「うわっ」

グイと強引に引っ張られて、胸の中に抱き込まれる。

さっきまでの態度は一体なんだったのかと思うほど、回された腕は優しかった。

触れられる感触が、今までと違って思えるのは何でだろう。

意識した途端にドキドキしている俺のことなどお構いなしに、鷹司先輩はぎゅっと俺を抱きしめた。

「ちょっとだけ、貰ってもいいかな」

「へっ！？ な、何を……、ですか」

「キミの中を流れる……その甘美な、血。」

「えっ、はいっ？ えーっと……」

突然のことで思考が混乱しかけたけれど、先輩もヴァンパイアなのだから（と勝手に思っている）まあ仕方がないかなとも思った。

「俺ので良いのなら……どうぞ？」

「良かった。それじゃあ……ちょっとだけ、チクッとするけど、我慢してね」

「はあ……、っ、いたっ」

抱きしめられた腕に力がこもると同時に、首筋に針が刺さるような鋭い痛みが一瞬だけ走った。顔の辺りを先輩の髪が擦っているのを感じるので、俗に言う吸血行為がされているのだろっ。

（……なんか恥ずかしい体制じゃね？ もしかして……）

うわぁ、誰にも見つかりたくねえこんな現場……と一人妄想に耽^{ふけ}っていたけれど、すぐに先輩はその行為を止めた。

「……もう、いいんですか？」

「ん、ああ……大丈夫。痛くなかった？」

「それは、まあ。って……ん！」

人が話しているのに舐めるなよっ！

あるうことか、噛み付いたその首筋に舌を這わそうとしてくる（というか既に舐められてる）先輩の頭を抑えようとするとするけれど、時折ゾクゾクとする感覚が慣れなくて腕に力が入らなかった。

「ちよっ、もう……止めろってばっ……」

「ふふっ、可愛いね、凜」

「可愛くなくていいから舐めるなっ……っ！」

「残念。もうちよっ、味わっていたかったのに」

全然悪びれもなく楽しげに笑われると、腹が立つけど呆れるほうが先に来るのは何故なんだ。

ガックシとうな垂れる俺を余所に、ちゅっともう一度だけ舐め取ると、先ほどよりも妖艶な笑みを浮かべて唇にも口付けを落とした。

「ん……っ」

「ごちそうさま。凜から元気を貰ったことだし、行こうか」

「は？ 行くとって……どこへ？」

「行けば分かるから。しっかり掴まっててね」

「えっ、ちよっ、うわっ」

その瞬間、強烈な浮遊感が身体を襲った。

思わず目をぎゅっとなぐってその衝撃に耐えていると、やがてそれは収まり、地面に足が着くのを感じた。

そつと瞳を開けると、そこに広がっていたものに驚愕した。

「な……んで、こっ」

「さあ、おいで。お茶でも飲みながら、話してあげるから」

相変わらずマイペースに進む先輩に引っ張られながら、その中へと入っていった。

「だって、ここは……」

そう。

そこは。

その場所は、いつかの宝物のような日々を過ごした
ーランの館、だった。
シュ

第二十四話

扉を開けると、いつか見た風景と変わらない景色が飛び込んできた。

広い大きなエントランスに、豪華なシャンデリア。洋風を中心とした煌びやかな内装は、遜色褪せることなく華やかなまだ。中央に位置する幅広の階段は、小さな頃に転げ落ちてみんなを心配させたような記憶がある。

「エイ、カナメ」

鷹司先輩が慣れた口調で二人の名を呼ぶと、制服姿ではなく、まるで執事のような白いシャツと黒いタイ、同じ色のスラックスにベストを身に付けた英先輩と四柳院が現れた。

「「ここへ」」

恭しく頭を垂れて、きつちりと礼をする二人。

そんな二人の様子に戸惑いながらも、どこかで納得している自分がいた。

「あの部屋へ入る。私とリンが入ったのち、嚴重に結界を張れ。内側から壊すまで、何人たりとも進入を許さぬ。よいな」

「……なっ、それは……！ フェルーナ様！」

「反論は許さぬ、カナメ。エイ、後を頼む」

「私としても、反対を申し上げたいところですが……良いでしょう。御意に、我が主」

声を上げる四柳院を制止し、英先輩が受諾すると、四柳院もそれに従った。

俺はどう反応したら良いのかわからず、ただそのやり取りを見守っていた。

その答えはきつと、今から分かるだろうから。

「リン、おいで。『約束』を、守ろう」

鷹司先輩の言葉に無言で頷いて、その足が向かう部屋へと入っていった。

見覚えのある、ひんやりとした室内。

どこかで見た白い壁。

その先には、いつか目覚めたシューランの部屋だった。

豪華なベッドには幕が下ろされているけれど、誰かがいるのを感じた。

カチャン、と扉が完全に閉まるのを確かめると、ピンと張り詰めた空気が周囲を覆ったような気がした。もしかしたら、さっき言っていた結界というやつなのかもしれない。

「センパイ……？」

呆然と立ち尽くすしか出来ない俺は、この後どうすればいいのか分からず先輩へと声を掛ける。

穏やかな……どこか決意をしたように見て取れる先輩の表情が、やけに印象的だった。

「ごめんね、リン。僕はずっと、キミを振り回してばかりだった。

どうしてもキミが欲しくて……忘れられなくて。僕の我儕が、キミの人生を狂わせてしまったんだ」

「え？」

「だけどキミは、果たされてはいけない約束を守ってしまったんだ。だから僕は……明かさなくてはいけない。哀れな男の結末を。キミの血に隠された　　真実を」

「しん……じつ？」

一体何を、と尋ねる前に、目の前の布が捲くられる。

目にしたものは、人形のように美しく、まったく生が感じられない男の姿だった。

銀の美しい髪。透けるように白い肌。長い睫毛に真っ直ぐに通った鼻筋。

閉じられたままの瞼の奥には、同じように綺麗な瞳があるのだろう。

左右で異なる、美しい色をした瞳が。

「シュ……ラン？」

ともすれば衰弱しているかのようにも見える、求め続けていた人の変わり果てた姿。

ただ眠っているようにも見えろけれど、この人が眠……っているはずがない。

「どうして……」

眠らないはずの彼が、何故ベッドに横たわっているのだろう。やっと会えた喜びよりも、不安と恐怖が襲った。

ふいに鷹司先輩のほうを見ると、申し訳なさそうな……どこか苦しげな表情で微笑んでいた。

「まずは昔話からでしょうか。ここにお座り」

そういつて、俺をベッドの傍にあるソファへ促すと、鷹司先輩も向かい合わせの形になるように座った。

「むかし、昔。今よりもずっと遠い昔。それこそ、キミがまだ私や、この男と出会うよりも、キミが生まれるよりずっと過去に時間を遡らなければならんだ」

そう切り出して、先輩はどこか物語を話すような口調で語りだした。

山奥の中にひっそりと、村とも呼べないような部落がそこにはあった。私の母はその部落とは離れたもつと奥深い森の中で、ほとんど人と会うことなく静かに過ごしていた。

ある時、少年が部落で禁止されていた区域へと入り込んでしまっていた。

母はそれを侵略行為として諫めようと姿を現し、その者に警告を発した。

「部落の者よ。ここは我らが一族の領域。早々に立ち去るが良い」

「！？」

「……我らと盟約と結んだことを忘れたとは言わせない。我らがこの地を治める代わりに不干渉であることを。もはや、これ以上の愚行を許す気はないぞ」

「……ま……さか、貴女が森の、魔女？」

「ふう……なんだ、唯の迷子かゆえ？ 最近は特に部落の者どもの

侵略行為があつたかと思えば、私の住处近くまで来られたのが迷子とは……世も末じゃな」

はあー……と人間臭くため息を零し、部落の近くまで送つてやるぞ、と珍しく迷子の救出をしたのが始まりだった。

それから数年後、少年は遅しい大人の青年へと成長し、澄んだ碧い瞳はさらに輝きが増し、艶めく銀の髪を無造作に散りばめながら、やがて魔女に恋を囁くようになった。

「ねえ、僕と一緒になつて欲しい。僕は村長の娘と結婚する気はないんだ。僕が欲しいのは初めて会った時からキミだけだし、これからも貴女だけだよ」

「ふう……レイン、またその話か。何度も言つておろう。我はこの地から離れられぬし、そもそも種族が違ふであらう」

「そんなの関係ないよ。僕はただ、キミとだけいただけなんだ。愛してるんだよ」

「むうー、またそのような戯言を」

「あつ、またそんな連れないこと言つ。ねえ、僕は本気だよ？」

「あーはいはい、分かつた、分かつたからもう早よ戻るのじゃ。ここ数年、お主は見事に部落のものを騙し通し、魔女の住处へと来よつたが、うすうす怪しんでおるものもおるのじゃぞ？ そうなつては、お主が困るであらう」

村の中で居心地が悪くなつてしまふぞ、と軽く嗜めると、そんな関係ないとばかりに甘い言葉が嵐のように飛び掛る。

何とか宥めて村に帰した後、魔女は一人思案に暮れていた。

（まいったのお……これで嘘偽りがどこにもないと言つたのだから、人間というものはほんに面白い。しかし……）

長い年月を、ずっと一人で過ごしてきた魔女にとって、その存在は悦びでもあった。

同種は我が一族を破門も同然の扱いであるし、一族の者もほとんど残っておらず、共に生きるものもない。

青年が村での成人の儀が終わって、それでも村の者と一緒にならぬなら。

そこまでして自分を選ぶのなら。

そんな希望にも似た未来を、望んでしまった。

ヴァンパイアが人間に恋をし、共に悠久の時間ときを生きる。

そんな、あつてはならない未来を。

過去に同じ過ちを犯し、闇に葬られた先祖と同じ道を、選んでしまった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0647i/>

Vampire Blood

2011年11月17日18時13分発行